



TITLE:

人文 第16号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第16号. 人文 1977, 16: 1-45

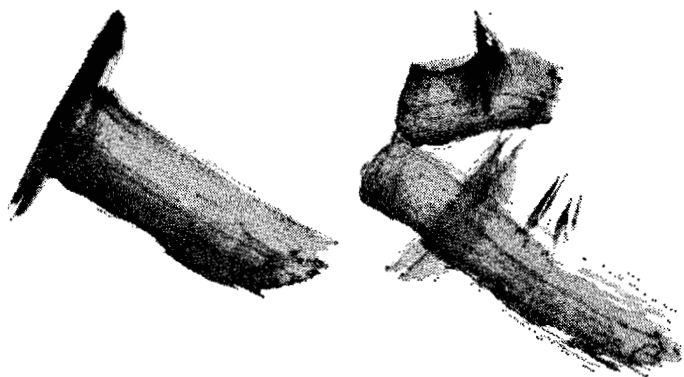
ISSUE DATE:

1977-03-20

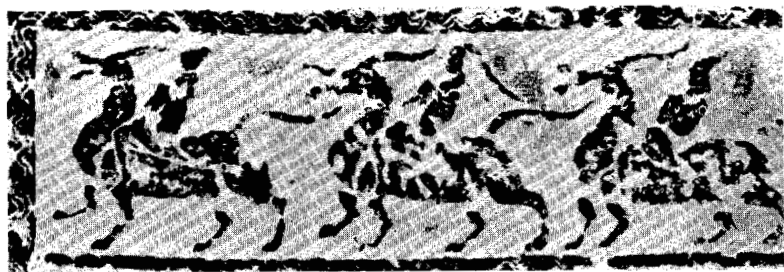
URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57142>

RIGHT:

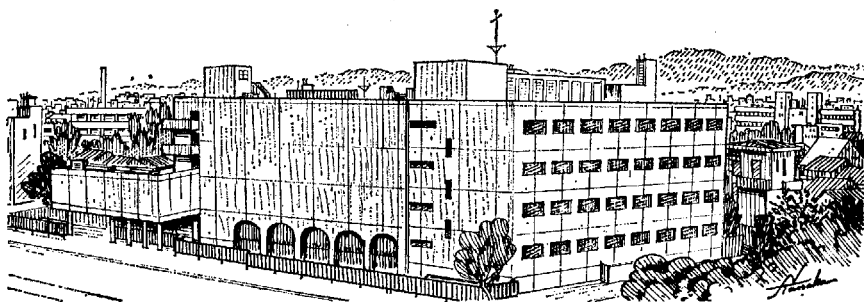


第一六号



1977

京都大学人文科学研究所



人 文 第一六号

1976年6月—11月

も く じ

わたしの考え

伝統の重み

川勝 義雄

講演

開所記念講演（五十年度）

ルソーにおける友情について（樋口謙一）／文字と左利き（尾崎雄二郎）／大正初期の労働組合観（大前眞）

夏期講座

『ポール・ロワイヤル論理学』（山下正男）／シュメールの「こ
とわざ」から（前川和也）／北一輝『国体論及び純正社会主義』

古屋哲夫／下関条約（副島圓照）／徐霞客遊記（日比野丈夫）

／『礼記』学記篇（池田秀三）

開所記念講演（五一年度）

「人材」論（園田英弘）／夢窓と一休（柳田聖山）

書評

飯沼二郎、堀尾尚志『農具』（江村）／上山春平編『照葉樹林文
化』上山、佐々木、中尾『続・照葉樹林文化』（茂木／吉田光

邦『工芸』（曾布川）／神野慧一郎、内井窓七『論理学』（山下）

／林屋辰三郎『中世の開幕』（勝村）／林屋辰三郎編『化政文化
の研究』（谷）／飛鳥井雅道『近代の潮流』（吉川）／河野健二編

『ルソー』（園田）／谷泰『牧夫フランチェスコの一日』（秋山）

共同研究のうき

前近代における社会動態（中村）／日中戦争期の政治と社会（古
屋）／現代中国班の二年（竹内）

研究ノート

私の日本近・現代史（飯沼）／国民経済観の二類型（阪上）／十九
世紀のウィゲル文獻（浜田）

旅

日蔭のない国（熊倉）／シカゴ大学オリエント研究所から（前川）

／旅・メキシコ（吉田）

わたしの考え

伝統の重み

川勝義雄

「わたしの考え」という題で書けといわれると、かえって思いは千々に乱れて、とりとめもなくなるものだ。かつて『史記』列伝を訳したとき、巻ごとに出てくる「太史公曰」の四字を、「わたしは思う」と訳したのを思いだす。Cogito, ergo sum. などという哲学者でもないかぎり、具体的な人物や事象についてでなければ、「思う」ことも出てきにくい。

この秋は、貝塚茂樹先生が文化功労者になられ、つづいて塚本善隆先生が学士院会員になられた。両先生に対して、心からお喜び申し上げるとともに、わが研究所、ことに私の属する東分部にとっても、それはたいへん名譽なことであった。が同時に、その輝やかしさによって、伝統の重みが、あらためてひしひしと身に迫る今日このごろである。

そこで私は思う。貝塚先生のお仕事は、甲骨卜辞や金文などの新しい史料に目をつけて、その解説と新解釈を基礎にする新鮮な中国古代史学の開拓であった。塚本先生もまた、従来 of 仏教学者が軽視していた金石資料や石窟の調査を通して、目を見張るような新しい中国仏教史学のジャンルを開拓された。両先生とも新出資料や実物にじかに接し、それに近代歴史学の実証的方法を適用することによって、新分野開拓の一つの基礎にされた。それは今から見れば、研究の出発点において、幸福な時代環境におられたといっているまいだろう。



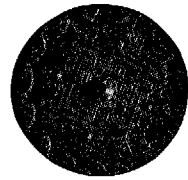
たしかに、まだ蓄積の多くなかった東方文化学院時代に、その資料蒐集はたいへんなことだったとは想像できる。しかし、まだ人があまり気付いていなかっただけに、新分野開拓のための資料蒐集と整理には、また楽しみもあったろう。私は反対に若いころ、すでに膨大な蓄積になっていた書籍整理に追われたせいか、華髪もいよいよ目立つ現在では、その面の努力を、もはや一まわり若い世代に任せたい気持ちになってしまった。

では、私はどうすればよいのだろうか、とつくづく思う。現在、私が担当している共同研究「中国中世の文化と社会」の研究班では、多くの時間を『弘明集』の訳注作業にあてている。いわば、塚本先生が始められた研究の継続であり、それをどう発展させるかが目下の課題である。先生の明晰な説明によれば、中国における仏教受容の歴史は、「印度の釈迦がいかにして仏になったか」の釈迦伝、中心の仏教から、「印度の釈迦は何を説いたか」の仏法、中心の仏教へ、さらにそれによって「中国の我々はいかにして救われるか」という真に主体的な中国仏教へと発展していった。論調は精密周到であって、容易には乗り越えがたい体系をなしており、中国仏教史の大すじはそれで尽くされているだろう。この説を、より広い中国の文化と社会の発展の中に、どう組みこむか、私は課題の大きな難しさの前に、茫然と立ちつくしているところである。

ふりかえって思うに、塚本先生も貝塚先生も、堅実な実証研究を基礎にすえながら、しかも単なる実証史学だけの学者ではない。鋭い直観と壮大な構想力を具有された歴史家である。私はその驥尾に付したいと思う。しかし、いたずらに大きな課題を空想していいのだろうか。「おまえのような奴を、よくも実証史学の本山が傭っておくものだ」と、さる口の悪い男に言われたことがある。これでよいのだろうか、私はつくづく思う。



講演



開所記念講演（五十年度）

一月八日
於分館講堂

ルソーにおける友情について

樋口 謹 一

「恋愛と友情とはわたしの心の二つの偶像である」。ルソーは『告白』においてこううちあけている。「友情」はルソー自身の生涯においてのみならず、その思想においてもカナメの位置を占めるとしてよからう。

『社会契約論』冒頭の有名な文章が言うように、人間は「自由なものとして生まれた」。それは自由状態における人間のありようを言ったものにほかならず、

社会（＝国家）状態では、よかれあしかれ、人間は「鉄鎖」につながれている。『エミール』で人間が「弱いものとして生まれる」とするのは、右の事実をさしたものである。人間のこのありようを「正当なものにする」ことこそ、ルソーにとつての課題の核心をなし、その解決は「友情」にかかっていた。

社会状態での人間は、「他者の援助」なしには生存できず、これを充すものは、「平等者」間の友情、つまり「苦の分有」である。人間の「弱さ」とは、人はみな「自己充足」できないという人間「共通の弱さ」なのである。この人間性の「同一性」（イダンチテ）をふまえた「苦しんでいる同胞との同一化」（イダンチフィケーション）、つまり「共苦」（コンミゼラシヨン）による「相互充足」が「友情」である。

この人間関係における相互性こそ、ルソーにあって「契約」を支えるものにほかならなかった。ルソーが人類の黄金時代とする「生まれたばかりの社会」では、「共苦」「憐み」の感情が強く「自由・独立の交り」（コムルス）が可能であったが、より進んだ社会状態ではこの感情が弱くなり、「理性」の助けが必要となる。

この両者の協力によって、「情念の沈黙のうちに、人間が同胞に要求しうること、同胞が自己に要求する権利をもつことについて推論する悟性の純粋な行為」

が成立する。それは、各個人においてはたらく「一般意志」であり、「各市民にたいして公共理性の教えを語りかける天の声」である。

ルソーにおける「友情」をさぐって、ふたたびその生涯にもどると、彼は自己にとって必要なのは「男友達よりも女友達である」(恋人でなく)とし、そのためには「同一の体の中の二つの魂」をもたねばならぬとしていることにつきあたる。このアンドロギュヌム性(両性具有願望)のはらむ意味は、ルソーに即しかつルソーも超えて、さらに深くさぐられねばなるまい。

文字と左利き

尾崎 雄 二 郎

右利きの人間は、左利きの人間に比べて圧倒的に多いから、利き手の右を使うことが、多くの事柄について正当であり、正常である、とされる。

そうして、多くの事柄について、顧慮されるのは右利きの人間の利便であり、無視されないまでも、多く

の顧慮を払わないのは、左利きの人間の利便である。文字の世界もまた右利きの人間の世界であり、左利きの人間の利害は、しばしば無視される、というのが私の話のいわば核であつたのだが、同じ頃発行されて本屋の店頭にあつた『暮しの手帖』38号、松田道雄氏「左利き友の会始末記」の核になるものもまたそうであることを知つたのに牽掣されて、あり得べき脈絡をさえ失なつた。

異例であらうが、そこで私の触れるべきであつて、しかも果たさなかつたことを、書かせていただきたい。

アラビア文字、もしくはそれと同系の文字が、右に筆を起して左に及び、文字の行そのものも右から左に進むのを、左利きの人間の利便が顧慮されないという例となし得るか、という反問がある。

行そのものが右から左に進むのは、たとえば漢土の書写習慣がそうであるように、当面の問題以外の場所でも、習慣として固定し得る。あるいは私がその時触れたような、右左どちらか一方が、より神聖な、より上位の、方向である、というような思考とつながつての事柄であるのかも知れない。

書き易さということについていうなら、右利きの者にとつての、最も書きにくい線は、おそらく右に起こ

って、水平に左に向かう線、特に起筆としてのそれ、であり、左利きの者にとってのそれは、むしろその反対であろう。この、あとの左起こり右向きの、左利きの者にとって最も苦手の水平の線が、漢字の筆画の中には、やたらに多いことを確かめた上で、次にアラビア文字の左に向かう線は、ただちに水平に左に行くのではなく、一旦は斜めに向かつて下がり、また上がる式の、いわば「やわらげ」を伴なっているものであることを、ヘブライ文字の左に向かう水平の線が、決して起筆ではなく、常に先立つ垂直の線の連なりとしてあることを、私たちは忘れまい。そこに顧慮されてあるのは、右利きの者の利便である。

左に向かうのは「聖」のレベルのことであり、しかもなお且つ、右利きの者の利害がそこに顧慮されてあるのだとすれば、やはりこれは右利きの者の世界だと私が言おうとするとき、人は私の詭弁を嗤うであろうか。



大正初期の労働組合観

大前 真

「日本の労働運動も大体、英国流の労働運動の流れに従うことを、最も健全なゆき方であると考えた」とは、日本労働運動の再建を期して、大正初年、友愛会（のちの総同盟）を創設した鈴木文治の言である。「英国流」との言葉で鈴木の意味したところは、労使協調を基礎とした社会改良主義であるが、労働組合の組織論という点では、英国の skilled trade の職業別組合組織を理想としていた。

高い組合費と徒弟規制で、労働力の販売制限を確保し、労働貴族とさえ呼ばれるようになっていた英国労働者を、当時の日本の労働者とひき較べて、鈴木が理想化したのも無理はない。

鈴木は、まず、故事にのっとり、friendly society の名を借り友愛会をスタートさせ、職業別組織化を企図するが、日本には徒弟制度も高賃金もなかったのだ

から、英国と同じ發展経路をたどつての組織拡大はありえなかった。そうだとすれば、友愛會職業別組織化の方針は時代遅れであつたのか。

当時、読まれていた英国労働運動に関する文献の中に、一級の運動史家、理論家であつたシドニー・ウェッブ著の「産業民主制」がある。来日したこともある彼の著書は、友愛會とも関係のあつた安部磯男、高野岩三郎、山県憲一ら、進歩的な学者に注目されていた。

明治期を通して、労使間の問題は、常に富国との兼ね合い、主従の情宜を中心に語られてきたのだが、日露戦争後、ようやく「一等国」に仲間入りすると同時に、階級対立が現実感を持ち始めた日本において、労使の利害対立を自明のこととして認め、かつ国民的最低限、高賃金と国富の發展を保障しようとウェッブの理論は、労働問題に関心を寄せていた人々に新鮮さを感じさせたのであらう。

ウェッブの組合組織論は、徒弟制度を非科学的、非民主的、不健全として退け、新しい職業別労働組合を構想していた。鈴木らの念頭には、職業別組織に徒弟制度という図式はなかつたのであり、職業別組織化という友愛會の方針を時代遅れとすることはできない。サンディカリストの主張した産業別組織化が内包する労働者の階級一体性を強調する反面、諸階層の個別利

害を否定する傾向を持たない点で、全く未組織の日本労働階級にとつて、有効性と現実性をそなえていたのかも知れない。なぜなら、労働力商品販売者としての意識と反資本主義の意識とは別のものであるから。

夏期講座（五一年度）

八月一日—三日
於分館講堂

『ポール・ロワイヤル論理学』

山下正男

『ポール・ロワイヤル論理学』はその名が示すように、ポール・ロワイヤリストであるアルノーとニコールとの兩人が、一六六二年にパリで刊行した近世論理学の教科書である。彼らはともにジャンセンストであつて、本書にはおのずから、彼らの宗教的党派性がにじみ出ている。すなわち彼らはカトリックに属するもの

として一方ではプロテスタント、特にカルヴィニストに對立するとともに、他方では同じカトリック陣營の右派であるジュスイットとも對立した。そして實際この論理學書ではこの両面の敵に對する教義的論争が例題としていくつも登場するのである。

とはいえ、この論理學書における例題にはそうした宗教的トピックを扱ったものだけではなく、科学的なトピックを扱ったものも数多くみられる。そして後者に関しては、同じくポール・ロワイヤリストであったパスカルの仕事が、大いにとり入れられているのである。

ところで、この『ポール・ロワイヤル論理學』は、『思考の術』という別名からもわかるように、「我思考す、故に我存在す」で有名なデカルトの思想の影響のもとで成立したものである。そしてジャンセニストの論理學である『ポール・ロワイヤル論理學』がジュスイットの論理學やカルヴィニストの論理學との闘いに勝ち抜いて近世論理學の祖となるに至ったのも、近世哲學の祖としてのデカルト思想をいち早くとり込んだためと考えられる。

こうして『ポール・ロワイヤル論理學』は實際に近世論理學の原型といえるのであるが、このことは、近世論理學をそれより前の中世論理學とそれより後の現

代論理學の双方と較べてみることによって、より明瞭となるであろう。すなわち中世論理學は神のことばである聖書の解釈法としての言語論理學であり、近世論理學は人間理性の運用法としての思考論理學であり、現代論理學は計算機に乗りうる人工言語の操作法としての記号論理學であるといえる。だとすればまた、中世論理學は神學者用のものであり、近世論理學は良識ある人士用のものであり、現代論理學は科學者用のものであるということができよう。そして近世論理學のそうした性格はまさに『ポール・ロワイヤル論理學』から發したものである。

シュメールの「ことわざ」から

前 川 和 也

E. I. Gordon, *Sumerian Proverbs: Glimpses of Everyday Life in Ancient Mesopotamia*, 1959
の出版によって、シュメールの「ことわざ」についての研究は飛躍的に發展した。粘土板に書かれた数百の

「ことわざ」は、前三千年紀のシュメール人の日常的な考え・感性・行動を、じつにいきいきと教えてくれる。これは王碑文・神話・叙事詩・行政文書などを手がかりとしては容易に把握できない側面であった。

けれども、シュメールの「ことわざ」を本当に正しく理解するためには、まだまだおおきな困難が残っている。ひとつはもちろん、「ことわざ」の章句を文法的・言語学的に正しく読んでいくかどうかの問題である。たとえばゴードンの書の末尾には、ジェイコブセン (Th. Jacobsen) による訳が付されているけれども、ゴードンとジェイコブセンの訳は、ときとしておおきく食いちがっている。一例として、SP. 1.3—1.5 をあげよう。まずゴードンの訳。1.3「首を切られてしまっているものの首を切るな」。1.4「ニンギシュジダ神に「生かしておいて下さい」と言うな」。1.5「私が彼の門をくぐるようにさせるな」。これにたいしてジェイコブセンは、1.3—1.5「死刑執行人の剣に対して、「打首にしないで下さい」と、ニンギシュジダ神に対して、「生かしておいて下さい」と言うな。私が彼の門をくぐるようにさせないでほしい」と訳した。つまりゴードンは、それぞれ、すでになされていることをくりかえすな (1.3)、権限のないものに事を頼むな (1.4)、そして、自己の意志に反した行動をとらせ

るべきではない (1.5)、といった意味だとしたのに対して、ジェイコブセンは、これら三つの章句は連続して読まれるべきであるとしたり。

そしてここには、たんなる語句の文法解釈の差異をこえて、シュメールの「ことわざ」理解についての第二の重要な問題が含まれている。ゴードンは、この種の粘土板を「ことわざ集」(proverbs collection) と理解した。つまり、ゴードンは、数多くの「ことわざ」が書記によって集成されたのだと考えて、ひとつひとつの章句を単一の「ことわざ」として理解しようとしたわけである。これにたいしてジェイコブセンは、ゴードンが独立の「ことわざ」とみなした章句をおおく連結して訳しなおした。そしてこの方向は、最近アルスター (B. Alster) によって徹底的に進められることになった。つまりアルスターは、粘土板は「ことわざ集成」ではなくて、ひとつの一貫した “proverbial poem” として把握されるべきものであるというのである。ゴードンのように、ひとつひとつの「ことわざ」を独立的に解釈する態度は、メソポタミアの詩作品のモチーフを無視してしまうというわけである。これはこのような粘土板文学の、一貫した内的構造を把握することによって、メソポタミア文学を新しく照射しなおそうとしているのだといってよい (cf. B. Alster,

Studies in Mesopotamian Proverbs, 1975)。またアルスターのこの議論は、メソポタミア粘土板研究史においても、確実に新しい波が現われてきたことを示しているだろう。

北一輝

『国体論及び純正社会主義』

古屋 哲夫

北一輝は、二・二六事件の背後の首謀者として処刑されて以来、ファシスト或いは反動思想家といった形で葬られてきたのですが、一九五九年に彼の著作が復刻されてみると、彼の思想は天皇信仰的な一般の右翼とは異質のものだということがわかってきた。そして最近では彼の天皇観が思想的にも特異なものとして注目され、北一輝研究が盛んになってきたわけです。

北が天皇の問題を正面からとりあげるのは、日露戦争前夜に書かれた「国民対皇室の歴史的觀察」（佐渡新聞）という論文からですが、彼はここで、教育勅語

に述べられているような国体論は、「迷妄虚偽を極めたる妄想」であり、日本の歴史はいわば「乱臣賊子」の歴史ではないか、という痛烈な批判を展開しています。この時期には彼は同時に、ロシアとの開戦論を叫んでいるのであり、この国体論批判も、世界にのり出してゆくにふさわしい合理的国家意識の追求という点から発想されていたように思われます。そしてこの課題に全面的に取組んだのが日露戦争が終った翌年（明治三九）に刊行された『国体論及び純正社会主義』であつたということになります。

北はこの著作ではまづ、当時の流行思想の一つであつた進化論を基礎理論に仕立てあげます。簡単に結論だけ云うと、人類は生存競争の単位を家族↓部落↓国家に拡大することで進化する、つまりそれぞれの段階で個人の自主性が強められることによってより強化された社会意識が生み出され、それが進化の原動力になるというわけです。そして、社会意識が家長・君主への忠誠によって統合される段階から国家そのもののへの忠誠を基軸とする段階に進化することで近代国家が生まれたというのであり、それを北は、「家長国家」（或いは貴族国家）から「公民国家」へと表現しています。

ここから、さきにふれた国体論批判がより精緻な形で展開されるのですが、そこで彼が強調しようとして

いるのは、明治維新の本質は王政復古なのではなくて家長国家から王政公民国家への革命であったという点です。ここで北が天皇制そのものの否定に進むことも論理的には可能であったと思われますが、北は反転して、明治天皇は維新革命のリーダーとなることで、小家長君主から公民国家の最高機関に転じたと主張し始めることになりました。

北はこの著作全体を通じて、忠君よりも愛国を優位におき、国家を改革、拡大してゆくことが、人類進化の道に合致するのだという点を強調しているわけですが、しかし同時に、この実証的な根拠のない明治維新論は、のちの「天皇大権によるクーデター論」への抜け道を用意していたとも云えるかと思えます。

下 関 条 約

副 島 圓 照

下関条約とはいうまでもなく日清戦争終結後、その講和条件をとりきめた条約である。講和条約とは一般

に戦争の原因、目的、戦争による両国の関係の変化をしめす総括的文書であり、すくなくとも何らかの歴史的条件の変化によりそれが失効しないかぎり、両国のその後の関係を基本的に規定するものである。そして下関条約は以後数十年にわたる周知のような両国の関係を方向づける出発点に位置するものであった。同時にそれは後発資本主義国日本が、その後、東アジアにおいて唯一の帝国主義国に転化し、列強帝国主義に伍していくために手に入れたパスポートでもあった。

しかし、講座のテキストをえらぶとき、後にこのような「復命書」を書かされることに思いついたらなかったのは少々うかつであった。およそ歴史上にその文書の名称はほとんどの人が知っておりながらも、実際に自分で直接原文（訳文でもよい）の全文を読んだということになる、きわめて少数の人に限られる文書は数多く存在する。かの「人権宣言」や「独立宣言」といった類の文書にしてさえもがそうであろう。そこで私は比較的ポピュラーで、なおかつ一回の講演で全部が紹介できる文書をえらんでみた。そして、自分の論旨の展開にそれととりいれ、新たな見解を提出するというより、むしろ、講演の趣旨を馬鹿正直にうけとり、できるだけ原典を忠実に「読」み、説明を加えることに徹した。したがって日清戦争論というよりも、むしろ

ろそれが条約という形でどのように結着がつけられたかを紹介することを通じて日清戦争の性格を考えることに主眼をおいた。その結果、その要旨をまとめることを申しわたされたたん、はたと困惑してしまったのである。

しかし、ともあれ、私にとってこの講演のために、これまでの研究でもほとんど問題にされない些細な点までふくめて、少くとも条文に関するかぎり、どんな質問にもこたえられるだけのつもりで、漢文もあわせてたんねんに読ませる機会を与えていただいたのは幸運であつたかもしれない。

ただ、条約中日本語では「清国」、漢文では「中国」となっていることの意味を問われたとき、明確にこたえられず、多分ここにも日中兩國間の対等でない関係が表現されているのではないかと推測したのみであつたが、どうもそう単純なことでもないようだ。ちなみに、その後すこし気になって調べてみたところでも、日中間の最初の条約で、対等な関係で結ばれたとされる一八七四年の修好条規では、漢文では「中国」であるが、日本語では「大清」であり、その三年後の台湾事件交換条約では漢文では「中国」、日本語ではすでに「清国」となっている。これについてはここで論じる余裕もないので、事実だけを提出するにとめてお

きたい。

『徐霞客遊記』

日比野丈夫

この書物が日本で読まれるようになったのは、比較的新しいことである。一個人の旅行記としては空前の大部のもので、中国でも奇書として一人の人々には注目されながら、あまり普及しなかった。徐霞客その名は先祖、霞客とは号である。徐氏は江蘇省江陰県の名族で、先祖は一六世紀の末に生まれ、一七世紀の前半、明末の何十年かを中国各地の旅行に費した。もともと遊記の草稿は現存のものより遙かに多かったが、明末清初の戦乱にいつたん散乱したといわれる。その友人で学者として有名な錢謙益のごときもこれを惜しんで遺稿の蒐集と出版を考えていたという。先祖とは同郷の出身で雲南巡撫となつた楊名時はこれをまとめて四庫全書館に進呈し、自分の実際の政治にも利用した形迹がある。しかし、出版されたのは乾隆四十年で、著

者の死後百年以上もたつてからである。

その旅行の範囲はきわめて広いが、もっとも詳細な記録を残しているのは、最後の西南辺境の旅行である。この地域に広く発達している石灰岩の地貌に対する微に入り細をうがった観察、河流の浸蝕状態や変遷についての考察、あるいは火山の生成や噴火に関する伝承説話、岩石、植物の実際的な記述など、旧来の旅行記には全く見られない、直接事物で即した文章に満ちている。それだけに文学的、歴史的な内容には乏しいが、自然に対する鋭い観察と、旅行者としての体験をこれほど真に迫った形で表現したものは珍しい。描写の確実さは精彩に富んだ文章と相まって古今独歩と称してよいであろう。清末の李慈銘はこの遊記を評して、明人にありがちの讀書不足があらわれており、学問的価値がないといっているのは当たらない、随处に西南辺境における漢人の進出、土司の勢力、土人間の紛争など歴史的な資料も見られるのである。

この遊記をとくに高く評価したのは、民国の丁文江であった。これを純然たる自然科学的著述の傑作であるとし、揚子江の上流や南、北盤江の水源等の実地踏査をふまえた考察は、西洋人の地理的発見にも比すべき業績であると賞讃した。しかし、それは過大評価のようで、徐霞客が自然科学に興味をもったのは、西洋

の宣教師たちとの交友の結果だとするのも考え過ぎのようである。明末、知識人の間に急速に高まってきた実学の一つの現われとみた方がよいであろう。

『礼記』学記篇

池田秀三

『礼記』学記篇は、「原典を読む」という講座の趣旨に、質量ともに絶好の題目であると自負している。但し、肝心の講演内容については、意欲なくして言多しではなかったかと、甚だ自信がない。

解釈は鄭注及孔疏を主とし、「集説」「訓纂」等を参照してその妥当と思われるものを採択した。実は、私自身は経書本来の意味よりも、それがどう読まれてきたか、或いは何故かく読もうとするのか、という方に興味があり、各種の注を適宜取捨選択するのは余り好みではないのだが、講座の意義から考え、かかるやり方をとったのである。現代風の言い方で解説したり、今日の問題に結びつけて敷衍した所以も亦たそこに存

する。

儒家思想の第一の特徴は学問尊重である。学問なくして人格の完成、延いては国家の繁栄はあり得ない。従つて、為政者に対しては、教育を重視し学校を整備興隆すべしという主張になるのである。古代の学校制度については、「孟子」「左伝」「周礼」「礼記」等に見えているが、机上の空論も雜っているようで、後世の学者の努力にも拘らず、はっきりしたことは不明である。しかし、早くからかなり進んだ学校制度のあったことは否定できない。

学記は、この制度の考証に資すのみならず、当時の教育理念、具体的方法を伝えている点で非常に注目される一篇であり、宋儒が礼記諸篇の中で、「学・庸」「楽記」に次で評価したのも故なしとしない。本篇の成立は、「兌命」原文が引用してあること等より見て戦国末ごろと思われるが、勿論それ以前の伝承を受けているであろう。私見によれば、全体は四章十九節に分れる。第一章（三節）は教育の重要性を説く。第二章（六節）は、大学の制度、理念、教育方法を説く。第三章（七節）は、教師たる者の心構え、要領を説く。第四章（三節）は学を本とすべきことを説くが、やや異色であり、或いは錯脱が有るのかもしれない。中心となるのは第二、三章である。この部分は、実

際に教育に携わつた者でなければ書き得なかつたと思われる。先天的素質よりも後天的学習効果を重視し、画一的強制的教育を否定して個人の自覚に待ち、易より難へと段階的に進めていこうとする教育論が、精彩をもつて展開されている。就中、「教えなるものは、善を長ぜしめて其の失を救うものなり。」の一語は、深く玩味すべき価値を有している。

開所記念講演（五一年度）

一月一三日
於分館講堂

「人 材」 論

園 田 英 弘

日本には能力主義が定着しないとする主張がある。年功序列や学歴主義など、能力の自由競争を阻害する「日本的」事情がその原因だとされている。一方、日

本の近代の出発点となった明治維新は、「封建ノ制」を破り、「四民平等」「実力主義」の世を開いたとするのは常識に属する。一種の能力主義の成立である。明治の世に、能力主義の導入がなされたにもかかわらず、現在でも能力主義が定着しないとする議論があるのは、能力主義のモデルを西洋（特に米国）に置いているからである。西洋の能力主義は「私利」追求の延長上に位置づけられてきた。思想的な表現をとれば、個人主義的な観点から「私利」の増大こそが、社会全体の「公利」の拡大をもたらすとされたのは周知の通りである。優れた能力は「私利」追求のための有力な道具と見なされたわけである。したがって、個々人のもつランダムな目標を追求するための、諸能力の自由競争は当然の帰結となった。

一方、明治の変革が「学芸才識」をもつ者であれば、いかなる「高位高官」にまでも出世できる社会をもたらしたとする「天保の老人」は、同時に私利追求のためのランダムな競争を否定する人々でもあった。優れた能力は評価され、しかるべき待遇をすべきだとする発想は一般的なものであったが、それは直接、「公利」と結びつけられていた。言い換れば、能力発揮のための自由競争は認められたが、競争の場そのものは強力に「公」的のために組織化されていた。なぜ、こ

のような結果になったのか。私は、武士社会内にあった優れた能力に対する社会的位置づけが、明治以降の日本型能力主義の母体になったからだと考える。

「人材」という言葉が多用されるのは幕末期になってからであるが、この言葉は優れた能力をもつ人物という意味に限定できない、広がりをもっている。化政期の一論者は「聖賢ノ学」のみが「人材」をつくる学問であるとして、実務を志向する学問は「人材」形成とは無関係であるとした。しかし、天保末になると、海防のために必要な自然科学・語学、さらには様々の実務に通じた者まで「人材」というカテゴリーに入れてくるようになる。そして、このような「人材」観の変化に対応して、人材「登用」という言葉にかわって人材「選挙」・「選抜」という表現が見られるようになった。道徳的価値の体現度という不明瞭な基準が、客観的な知識に置き換えられ、この明確な基準のもとに優れた能力をもつ人物を「選ぶ」という観点が出現したのである。

江戸後期から明治まで、「人材」という言葉は、具体的な内容を変化させながらも、「公」的目的のための存在という意味では一貫している。また、「公」の意味を与えられていたからこそ、能力ある人物である「人材」は自己主張をできた。この能力観の日本的構

造は、西洋をモデルに見るかぎり一つの逆説がなりたつことになる。日本では能力主義が定着すればするほど、「公」的な性格を強め、能力の自由競争が西洋の意味では成立しなくなるという帰結である。優れた能力を集合主義的観点から位置づけようとする日本人の能力観は、弱められたとはいえ、現代にまで通じる問題である。

夢窓と一休

柳田聖山

京の天気は変りやすい。四方を山でかこまれた地勢のせいだ。京の町は、いつも曇っている感じである。そこに、千年以上も王城があった。多くの人々が、ここに集まる。功を成したものは少く、屍を野にさらした男の方が多い。当然、京は中世日本の墓場となる。そして墓地には、墓地の花がひらく。

夢窓と一休は、そんな花の思想と文学を造型化する。夢窓が暦応二年の夏より、その構築にかゝる西芳寺、

つまり苔寺の庭はかれ自身の墓塔である。夢窓はこの年の春、すでに滅後の弟子にあてて遺戒を書く。暦応二年といえ、日本中世史にとって重要な年である。京都では事実上の室町体制が発足し、吉野では後醍醐が死ぬ。両朝の帰依をうけていた夢窓は、自分自身を精算するのである。はからずも、かれは更に、十二年も生きのびる。天竜寺の造営をはじめ、二島六十余州におよぶ安国寺利生塔の造営がこの間に成る。地方と京、地上と天上を結ぶ大マンダラが展開するのだ。謂うところの北山文化も、東山文化も、五山の学問もその中に見通される。

苔寺の庭は、南陽忠国師の無縫塔と西山亮座主の坐禪石の話をテーマとする。いずれも、中国禅宗史上に名高い話だが、夢窓がこれを庭として造型化したことは画期的である。無縫塔は、中国古来の雲夢の伝説をうけている。雲夢伝説は、今日の湖南省より湖北省にわたる湖沼地帯を舞台に展開された、中国南方文明の核の一つで、黄河流域で形成された儒教文明とするとく対立する。楚辭はその代表である。夢と空想を人間精神の不可欠の営みとするなら、それは中国民族が生んだ最初の文学と言えよう。且には朝雲となり、夕には行雨となって君にまみえようと、楚の懷王に約する。巫山の神女の言葉を、こよなく愛するのは一休である。

狂雲集に収める約一千の詩偈は、何らかの意味でこの言葉を背景にもつ。それは、唐より宋の間に中国で展開した禪が、稀にしか表面化しなかった根の世界である。

夢窓が苔寺の庭に託したもう一つのテーマ、西山亮座主の話もまた、中国の禪が長く孕み来った学問と宗

おくりもの ①

貝塚茂樹名誉教授、文化功労者に

貝塚茂樹名誉教授は文化功労者に選ばれ、一九七六年一月四日、顕彰を受けられた。

同教授は、一九〇四年、小川琢治氏の次男として東京に生れた。一九二八年に京都帝国大学文学部史学科を御卒業、一九三二年本研究所以東方部の前身である東方文化学院京都研究所の研究員に任命された。同研究所が京都大学人文科学研究所に移管された後、同研究所教授に任命され、一九四九年より六年間所長を勤められた。一九六八年停年御退官、京都大学名誉教授として現在に至っている。

中国古代史の分野で多くの業績を発表され、特に殷周時代の同時代史料である甲骨、金文研究の日本における開拓者としての功績は大で、その分野を扱った『中国古代史学の発展』『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字、図版・釈文・索引』は不朽の価値を有するものといえよう。なお同氏の業績の主要なものは『貝塚茂樹著者集』として目下刊行中である。

(林記)

教の対決という、永遠の課題に新しい答えを出したものと見えよう。坐禪石は、どこにあっても水平でなければならぬ。それが、庭石と墓石の基本原理である。滔々と流入してくる宋元文明の波を前にして、夢窓はそんな醒めた眼の必要を、日本人に訴えた最初の人ではなかったか。

吉田氏に京都新聞文化賞

吉田光邦氏はこのたび、第二〇回京都新聞文化賞を受けられることになり、一月二四日午前一〇時、京都新聞社においてその贈呈式がおこなわれた。

この賞は、学術、文化の向上に貢献し、顕著な業績をあげた個人または団体に對し授与されるものであり、業績の範囲は、科学、芸術の各部門にわたるが、一般民衆の生活文化に関連するものに重点を置くとなっている。今回の選考委員は、嵯川虎三、小野竹喬、岡本道雄、末川博の四氏であり、京都の伝統産業研究に對する顕著な功績の故に吉田氏が最適格者として選ばれたのである。

氏の活動は周知のように多方面にわたるが、昭和二八年から二年にわたって人文研がおこなった「近畿における前近代産業の綜合調査」以来の、京都の伝統産業に對する息の長い研究活動と、京都という町に對する愛情のにじんだ評論活動とが、今回の受賞のとりわけ大きな要因であつたろうと推察される。

(山下記)

書 評

飯沼二郎、堀尾尚志『農具』

(A5判、二〇六頁、法政大学出版局)



この書は、具体的な日常の「もの」を通して、人間の生活と文化を追求しているユニークな叢書、「ものと人間の文化史」の中の一冊である。しかしこの書は、ただ単に過去の生活と文化を「農具」の歴史を通して明らかにしようとしたものではない。「日本の農具の伝統」を明らかにすることによって日本の農業の特質を考え、それを踏まえて日本の農業の「近代化」の方向をも考えていこうとする、甚だ実践的な意図をもって書かれたものである。当然、私がこの書を読み進める中で、常に念頭にあったことは、個々の農具への興味はさりながら、過去のものはや使用されなくなった農具

の解明がいかにこの現代的関心と係わるのかということであった。

この書の構成は、まず序章で世界史的に見た農具の展開を作物の種類、風土の相違等によって体系的に組み立て、第一章以下第五章終章まで、序章で体系化された理論によって、日本の主要な農具、特に耕起用の農具としての鍬と犁の展開を跡付け、現在の農具の機械化に説き及ぶという形になっている。本書によると、一〇世紀頃までは鍬の時代、以後一六世紀までは長床犁の時代、そして一九世紀までは再び鍬の時代、それ以後現在までは短床犁の時代とされ、これは浅耕少肥の農業から深耕多肥の

農業へと発展する日本農業のあり方に対応するものとされている。だから、一六世紀以後、鍬が再び耕起用農具の主要なものとなることも、「鍬一本主義」という語に表現されるような、日本農業の逆行とみるのではなく、深耕化という日本農業の一貫した発展にみあったものとして理解されている。農具はその時代時代の農業にみあった合理性を有しているのである。

この農具のもつ合理性がリアルにとらえられているのは第五章である。ここでは、明治政府の西洋化農政の失敗の後を受けた数人の民間人による、日本農業に即した短床犁改良への努力が、興味深く描かれている。まことにあたりまえのことであるが、日本農業の発展を支えてきたのは耕地に密着して農具、農法を改良してきた人々であった。本書の結論はこの平凡な事実にあると思われるが、現在の農政、すなわち本書に述べられているように、三百年前の「会津農書」に比べてさえ、甚だしく非合理的な官製の「昭和四七年福島県農事暦」に示された農政の現実を考える時、この平凡な事実の提示そのものに大きな意味があることが理解される。こうした点で、この書は

「農具」という表題を借りた、現在の農政に対する批判の書となっている。

最後に付加えれば、冒頭で述べたような問題関心をもった者からすれば、本叢書の本来の意図から逸脱するかもしれないが、

農業機械から見た将来の日本農業に対する具体的な展望にもう少しページが割かれてもよかつたのではないかと思われる。

(江村治樹)

上山春平編『照葉樹林文化』

上山春平、佐々木高明、中尾佐助

『続・照葉樹林文化』

(新書判、二冊、三〇八頁・二三八頁、中央公論社)

かんじんの自然生態学についてまるで無知なので書評は書けない。以下、単なる恣意的な感想の言葉にすぎないが、おおらかに讃辞を呈するようなゆとりはもち合わせていないから、手っ取り早く批評的言葉使いを(それもほとんど上山氏にだけ向けて)用いることにする。

本書は「日本文化のほぼ最深層に想定される縄文文化の復元の手がかりをもとめる模索的討論のリポートである。」(正篇「はしがき」)その方法として、哲学者上山春平氏の構想、司会のもとで生態学的方法が

用いられるところに本書の特徴があろう。

もっとも、上山氏はここで哲学者としての役割りを果たそうとするよりはつとめて聞き出し役にまわろうとしているようで、つまり、いわゆる哲学と生態学のぶつかり合いから生じる思想的なきびしき、おもしろさを見ることはできない。(だから、本書の特徴は生態学的方法にのみ存すると言いかえた方がいいかも知れない。)たとえば、正篇四四～四七頁。「上山▽…和辻哲郎が、『風土』で提起した「モンスーン地帯」「砂漠」「牧場」という三分法は、一種のシヨ

ックを与えたと言つてよいでしょう。この考えの特徴は、乾湿度を指標とする環境論的ないし生態学的観点です」「上山▽…和辻哲郎の、…あの類型の取りあつかい方は非常におかしいと思う」上山氏は哲学史的文脈の中で「風土」の「生態学的観点」を評価し、中尾氏は生態学(気候区分学?)自体の内部に「風土」を引き入れて批判していることになるのだが、上山氏は「和辻さんのあの見方は、非常に主観的に構成されているのじゃないかな」などと言つて対立をばかしてしまふ。おかげで碩学諸氏の豊富な知見をコンパクトにまとめて提供してもらえないことになったのだからいものねだりはすべきでないかも知れないが、こういう態度が「人間学的考察」(これは「風土」の副題だ)をあまくしているように思われ、残念なのである。上山氏自身「人間とは何か」という問いを追求する「過程でこういうシンポジウムを提案することになった」と「序説」(正篇)に書いているが、「日本文化の深層」を探るために必要なのは「解剖学のようなもの」や「生理学的方法」(正篇「はしがき」)以上に「人間学的考察」それ自体である。ないものねだりと

認めながらあえてこんなことを書いたのは、本書がかなり広範な読者に「一種のショックを与えた」らしく、マスコミにおいて多少センセーショナルな取り上げ方をされたようにみえる（筆者の思いちがいかも知れぬが）からである。「人間学的考察」においてきびしくない文化論がセンセーショナルになるのはよくない。本書は静かに読まれた方がいいと思う。本書の最も魅力的な部

吉田光邦『工芸』

（『世界の美術』18 カルチュア判、一二三頁、世界文化社）

今や美術書出版たけなわである。どの書店にも美術コーナーが設けられ、数えきれぬ程のシリーズものであふれている。おかげで欲しい図版が容易に手に入り便利なのもあるが、余りの豪華な装いに却って実害を被ることも屢々である。幸い本書の収まるシリーズは値段も適正である。全二十巻、東西の絵画、彫刻、建築、陶磁器、工芸、染織、書を含んでいる。吉田氏の「工芸」となれば、すぐ陶磁器、染織を期待す

分は自然生態学的な発想と事例にこそあるからだ。続篇の目玉である「東亜半月弧」の提唱にしても、社会生態学のないし文化論的（？）な論拠もならべられてはいるが、そしてそれ自体は示唆に富む面白さを感じさせもするが、「東亜半月弧」提唱の論拠としてみれば説得的でなく、ほんとうには、自然生態学的な根拠しかもっていないのではないかと筆者には思われた。（茂木信之）

る向きもあろうが、それらは別巻で扱われる省略された。

本書はおそらくシリーズのなかでも出色の巻であろう。豪華な一流の工芸を空想の美術館さながら一堂に会し、写真、レイアウトも悪くないから大いに目の保養をさせていたのだが、単にそれだけでなく、周到な構想の下に、図版がテーマに従って選択編集され、吉田氏の工芸に対する年来の考えを図を通して改めて知る仕組みになっ

ている。その意味では、これも言葉の全き意味での著作である。

著者は中心をヨーロッパの工芸におき、宗教的工芸、王侯貴族の工芸、庶民の工芸の三部に分け、とりわけ、その金工、宝石工、ガラス工に焦点をあてる。庶民の工芸が生れる近代以前の工芸（本書の大部分をこれにあてる）は、すべて宗教の聖なるものの世界のために、その超越者にふさわしい空間、儀式、祈りを演出するか、或は俗なる王侯貴族のために、その権力者にふさわしい豪華と優雅と権威を美しく演出してきたという。その例として、大はサン・ピエトロ大聖堂の祭壇、マリー・アントワネットの寝室から、小はチャリス（聖餐杯）、ルイ十五世の王冠までの作品が極彩色で掲げられる。その工芸の伝統は、著者ならずとも「黄金や宝石の色と光にみち、精巧な表現や細工に充満している」といわざるを得ぬであろう。そしてそのあくどくも華麗な黄金文化は、わびとかきびを持ち出すまでもなく、禁欲的に慣らされた日本人の好尚とは異質である。しかし著者は重ねて、「ヨーロッパのこうした強烈な力に満ちた工芸の伝統が、文化の重要な要素として大

きな領域をしめ、それが近代、現代にまで継続している」と強調する。

だからといって、本書の意図が、ヨーロッパ工芸の伝統の正しい認識だけにあるとみたらそれは皮相であろう。ここに雑って採用された東照宮、赤糸織鏡、初音の調度等が日本の工芸全体を代表するものではないの一般、これがヨーロッパ工芸の全体だとは考えられない。掲載された作品は、むしろ別の著書（「工芸と文明」）にみる黄金

神野慧一郎・内井惣七『論理學』

（A5判、二一六頁、ミネルヴァ書房）

この書物は、「モデル理論と歴史的背景」という副題をもっている。ところでこのモデル理論とはなんだろうか。抽象的で厳密な説明はさておき、いちおう、だれにもわかるような仕方では説明すればこうなる。まずモデルという語で絵画のモデル嬢を思い浮かべてほしい。すると絵画というものはモデルの絵画化ということになるであろう。それと類比的に小説とは小説のモデル

文化といった言葉で概括でき、日本をやや例外として、世界のあらゆる教会や宮廷を中心に普遍的に展開したこの文化現象の再認識を迫っているのである。読者の拒否反応を見越し、敢えてこの本を編集した所以である。世は民芸の流行が過熱気味の昨今一方で民芸運動に対しても一家言をもつ著者によって、このようなハードな、手ごたえのある本が生れたことを心強く思う。

（曾布川寛）

の小説化ということになる。だとすると記号論理學とはあるモデルの記号化、形式言語化ということになるであろう。

ところでいったん記号化、形式言語化が成り立った場合、そうした記号体系つまり公理系は、それ自身で自立しうるものである。そしてそのモデルなど忘れてしまってもいっこうにさしつかえない。とはいえこんどは逆にそうした既成の形式体系の外

に、その形式体系のモデルをみつけ出そうとすることも可能である。さきの喩えでいえば絵や小説のモデル探しというわけである。とはいえ、論理學の場合のそうしたモデル探しは、単にモデルの発見にとどまるのではなく、モデル理論の形成にまで行きつく。というのも形式的な論理体系にきちんと対応しうるようなモデルは、形式的体系と等価な構造をもったものでなければならぬからである。

こうして論理學におけるモデル理論は、公理論に負けないだけの理論性をもつとともに、モデルとしての具体性、具象性をも兼ね備える。そしてここに論理學におけるモデル理論の強みが存するのである。

さて、日本語で書かれた記号論理學の本は数多いが、モデル理論で書かれた論理學のテキストは内井君のこの書物が最初である。しかもモデル理論の入口だけを紹介するというのではなく、かなり高度なところまで導き入れて、読むものを堪能させてくれる。もちろんその導き方にもいろいろとオリジナルな工夫がこらされており、しかも一定の方針による首尾一貫性も十分認められる。ただ、本書の文体は理科学的人間

用、とくに数学研究者用のスタイルであつて、それに馴れていない人がいきなり読めばとまどうかも知れないが、それは馴れと修練の問題にすぎないといえよう。とはいえ、文科的人間用にもっと違った書き方ができるということも確かである。

ところで、本書の後半部分の「歴史的背景」の方であるが、本書の前半がせっかく

林屋辰三郎『中世の開幕』

(新書版、新書日本史3、二二二頁、講談社)

「新書日本史」とあるから、少し気楽に読めるかと思つたが、なんともしんどい本である。保元、平治の乱のところまで読んで、ついに腰を折り、巻末の参考文献を頼りに、すでに著者が書かれたものの幾冊かを、図書館まで借りに走つた。机上に積みあげた本を手にとって、あれこれ眺めているうちに、やつと、こう合点した。どうやらいま読んでいるあたりまでは、著者の大作『古代国家の解体』(東大出版会)を「中世の開幕」という立場から書き改められた

モデル理論で貫かれているのであるから、論理学史上におけるモデル理論の位置づけをもう少ししっかりとっておかれた方が、第一部の理解のためにもよかつたと思う。しかし後半部分は主としてもう一人の分担者の仕事であるようなので、内井君に対する評者のそうした要求はあるいは的外れというべきであるかも知れない。(山下正男)

ものであるらしい。そのために古代社会から中世社会を展望する視角が強くなつて、著者の中世像がなかなか発現せず、私はいらだつていたのである。そうと分ると少しは氣も落ちついたが、『中世の開幕』と題する以上、新しい社会を作りあげていく担い手をもっと最初からはつきり書いていただきたいという気持はやはりぬぐえなかつた。結章にきて、古代と中世では価値観が人間から土地へ転換すると述べられるのを読んだとき、何やらほつとして、租とい

う地代収入を基本とする律令国家が中世のいとぐちであるという本書冒頭の論点を、やつとすなおに同意しえたのである。

院政の支柱が王党と近臣の受領層であることを発見したのは著者に始まる。そうした事態を生み出した社会と政治との係りは、さすがに見事に叙述されている。けれども、自らの土地をみずからの手で守り通すことに、喜びを感じはじめていた名主層が、土地を保全するために受領と結びつきその受領が任国に土着すれば、そこにおのずから地方武士国が生まれてくるという、院政期の評価にふれる著者の主張を理解するには、それを証明する論理展開が、政治史とあまりに深くからまってなされるために苦勞する。律令国家の体質を鰻のな性格と不死鳥的な強靱さにたとえて説き起し、すんなりとは中世に移行しえないことを説明しようとするので、そうならざるをえなかつたのであろうが、読み進むうち、政治的な展開の面白さに眼をうばわれて、撰家の方が寄進地系荘園をテコにむしろ中世的な世界につつまれ、逆に院庁は王党を復権させ、皇室領を強化するという「古代反動」をひき起したのではないかなどと、

拡大解釈を楽しんでしまい、土地問題の本筋を私自身は見失いがちだった。中世の開幕を土地という視角から論ずるなら、寄進地系荘園やその後の土地所有が、中央や地方の権勢家との関係において形成されていく側面から説くよりも、社会の末端で実際に土地をつかんでいる名主層の要請によって、どのようにそれが変っていくかを探る方が、やはり本筋であると思う。

(勝村哲也)

林屋辰三郎編『化政文化の研究』

——京都大学人文科学研究所報告——

(A五判、四九五頁、年表索引付、岩波書店)

歴史家というものは、対象とする時代がたとえ変革期であるにせよ、そこに次の時代につながる要素を見つけだし、次の時代につながるように事実をアレンジして記述する能力に、長じている。歴史家には次の時代は知られている。いや少くとも、こういうなるのだというある種のイメージをもっている。だからそういう操作が可能なのである。おまけに整合的表現を求めるとい

うのが、学者というものの業でもあれば、最後に例の白河院の天下三不如意について一つ。著者の解釈も充分説得力があるが絶大な権力者にしていえる言葉とみれば、平凡に、「人の世のことなら意のままだが、自然と運と神仏には逆らえん」という程度に解したい。「双六の賽」を博奕の流行とまでみるのはいかがであらう。宮中では賽は振られていなかったのであらうか。

が出口にむかう新しい糸を、このもつれの中から発見できるのではなからうか。『化政文化の研究』、それがどの程度この糸のもつれの中にもぐりこみ、糸のより分けに成功しているか、専門家でないわたしにはそのあたりの判断はできない。ただ、その錯綜したラビリントスの中に、読む人を導きこんで、その中でいくつかの新しい出口に導く糸を、示唆していることは確かなようだ。

それにしても、読んでいて現代日本人の生活文化上の特徴と思われるもの多くが、この時代にすでに現われてしまっているという印象が、わたしをなんとも云えないうんざりした気持ちにさせた。もちろんこういうことを示すのが、本書の目的でもないし、そういうことを表だって主張していいない。しかし組織原理の原型や、地域的文化圏の配置にとどまらず、「美濃米を飯にたいて、鯛茶漬、初堅魚に、劍菱の酒を呑み、煉羊羹でも給べながら、山吹茶を呑んで、国分の煙草をくゆらして居らう」。また、然はいかぬ人は、相応の楽しみがもって、炭団でたばこを呑み乍ら、……といった生活態度にいたるまで、それは文化・

文政時代を語っているのでなく、なにか現在の日本人を記述しているような錯覚にとらわれる。朝はコロンビア・コーヒーとクロアチアンですまし、昼は勤め先で手打そばをすすり、帰ってはスコッチの水割りでかつおのたたきをしがみ、満足しきった顔をして、マッドレスのふとんに酔いころがる。子もち女のどん欲さにも似た消化力で有用なものはとりこみ、地獄耳のような好奇心で情報を集め、だからといって自分の本音はいっこうにさらさず、あちらもよければこちらもよし。蒸汽船がくれば、夜もねむれずといひ乍ら、茶化しきる。このしぶときは、たしかに口ばしの黄色い明治の文学青年の腰折れにくらべれば、なん枚腰というのか。このしぶとさがあったからこそ、文化を根こそぎゆるがそうとする西洋文明への溺死の危機を、のりこえて、敗戦をも耐えぬいたのかもしれないが、所詮これからなにをするのかと問われたとき、およそ答えかねる錯綜の中におちいっている

飛鳥井雅道『近代の潮流』

(新書判、新書日本史7、二〇二頁、講談社)

のもまた、こういう時代に源を発する日本人の形成によるのかもしれない。もちろん別の意味で、インドと中国という大国にはさまれて、鎖国的文化受容政策を護持しつつ、近代化を目指しているブータンのような国に、従来から声援を送ってきたわたしは、このしぶとさ以外に、コカ・コーラに象徴される現代文明の文化破壊力を阻止して、アイデンティティを保持しつつづける道はこの国にはない、と思っているのだから一概に子もち女のしぶとさを否定する訳にもいかなくなって、考えさせられることばかり多いのだ。

ともあれ、化政期につくられたものが、いまもなお生きているとすれば、明治の評仙も、とうぜん変ってくるにちがいない。『化政文化の研究』につづいて、幕末期の研究報告が準備されていると聞くが、それらを併せて、明治・大正・昭和文化の新しい見方が提出されることを期待している。

(谷 泰)

新書版二百ページほどの小冊子ではあるけれども、本書の内容はいたって濃密である。著者のなみならぬ抱負は、あとがきにうかがうことができる。あつかわれる対象は、廃藩置県から治安維持法の制定まで、つまり明治維新以後から大正末まで。おかれて出発した日本が、急速な近代化、資本主義化をとげた軌跡をたどるのが主要テーマであり、その前提として江戸時代の遺産が附論される。叙述はたんに事件の頂点をたどるのではなく、むしろ事件を形成する底流にたいして丁寧に視線がくばられる。福沢諭吉や夏目漱石までもふくめて民衆とよぶところの「民衆史観の試み」と著者がいわれる所以であらう。したがって叙述の材料は、巻末注にあげられた文獻リストからうかがわれるように、新聞、日記、自叙伝、小説等はもちろんのこと、いわゆる謠言のたぐいにもまよぶ。

では、日本近代史における「民衆史観の試み」として書かれた本書の最大の眼目はどこに存するか。著者のことばによれば、「近代化に成功した日本民衆の栄光と悲慘」、日本近代史における「光と影の両面」を描くことである。たとえば日露戦争

直前の状況を説明している。「ヨーロッパ

諸列強がすでに植民地分割には成功したとき出発した日本は、なんとしてでもその列強に肩をならべうることを、征韓論・日清戦争・北清事変の一連の動きのなかで、至上目的とするにいたってしまっていたのである。……近代化のなかで教育された国民自身が、しばしば政府よりも対外硬を叫ぶ例が多すぎたのである」。また日韓併合にかんしてつぎのようにいう。「このとき日本人のなかから反対の声がまったくいっていいほど上がらなかったことに注意しなければならぬ。当時の日本人にとっても、自身の生活の荒廃がもたらされていても、当時の表現でいえば、日本は「世界の一等国」となり、植民地分割に参加できるだけの實力をもてたという感覚が支配的

になったのである」。

これらの文章を読むと、なにが栄光であり、なにが悲惨であったのか、いずれの面が光であり、いずれの面が影であったのか、わたしの頭は混乱する。どこに栄光があり光の面が存在するのか。民衆とは悲しい存在だとの感覚だけが痛切にのこる。民衆は著者の救済の対象にはえられず、権力への加担者、ときにはお先棒かつぎのおめでたい加担者、として存在している。「どんな権力でも人民の一定の同意なくして存続できないという定義」を著者は支持されるというが、本書を読むかぎり、この定義は妥当しすぎるぐらいに妥当するように思われる。

わたしはおそらく著者の意図にはまりこんだ読者の一人なのであろう。(吉川忠夫)

河野健二編『ルソー』

(一九五〇・三・二、三三頁、平凡社)

正直な話、本当に困ってしまった。私は単純に書評とは、悪口を言うことだと思っ

ているのだが、『ルソー』には、ちょっとケチのつけどころがない。別に、素晴らしい

本だと言いたいわけではない。書評しなくてもいい本ではないか、と私は言いたいのだ。編者河野氏によつて書かれている「解説」はわずか三十八ページ。きわめて、平明、簡潔に書かれているが、それだけに一層、河野氏の積極的主張を読みとることはムツカシイ。樋口氏によつて訳された、ルソーの著作の断片。訳文は読みやすく、ケツコウだが、訳出された箇所がルソー学の現在の水準において適切であるか、否か、無学の徒の知るところではない。要するに与えられた材料の中で悪口を言うには、私はあまりに紳士すぎるようだ。

ところで、「愛と性の果てに」書きたいことを書きまくったルソーという男は、私の数多い嫌いな思想家の一人だった。彼の生きざまをウラヤマシイと思うことはあっても、ルソーからなにかを学ぼうとする気持などさらさらない。どうも、相性というものがあるらしい。かつて、私も人並にルソーに学ぼうとしたことがあった。大学に入学した年の夏、『社会契約論』に取り組んだ。結果は二週間で、忘れもしない、五十三ページ。誤解なきことわっておけば、原書ではなく、岩波文庫でのありさ

ま。さらに悪いことが重なった。『社会契約論』を読了し、きっちり理解できたと自称する友人が遊びに来た。高校の時からなにかにつけてライバル意識を抱いていたこの悪性の友人との、一夜の宴は、何を話したのか定かではないが、快飲・清談でなかったことは、今でも忘れることはできない。私におけるルソー嫌いの始まりである。それにしても、河野・樋口両氏のルソー愛好性はどうかであろうか。『ルソー研究』より二十一年。未だに、ルソーから学び、ルソーの思想の中から「現代の文明を批判

谷 泰 『牧夫フランチェスコの一日』

——イタリア中部山村生活誌——

(B6判、二三八頁、NHKブックス)

拝啓、地中海にも冬がやって来しました。日本の冬はさぞ寒いことと存じます。村に送っていただいた御本、大学で習った日本語をたよりに何とか読んでみました。何か日本でも有名な賞を受けられたとか、おめでとうございます。私達の村のことがこの

し、現代の課題の解決に寄与しうる近似値の発見を試みる」ことが必要だとされる。私には、残念ながら、両氏の学問的営為にこのことがどのように反映されているか具体的に指摘することはできない。しかし、「意外に反近代的であり、反文化的であり、また革命的な思想家」でもあるルソーと、当然のことながら穏健な近代主義者である両氏が「縁が切れずに現在に及んでいる」、この取り合せの妙は、後学の徒にも示唆するところ大であった。(園田英弘)

ような一冊の本になり、日本の人々に広く知られるようになったこと、村の人はみんなとても喜んでいます。私から内容は大きっぱに説明してあげたのですが、本の写真をみてこれは自分だ、誰それは写真うつりが悪いのだと、しばらくはこの話でもちき

りでした。特に本の題目にまでなったフランチェスコおじさんは、やっぱり村の本当の代表はバストーレの俺だ、といきまいています。当時先生方が村に泊りこみ、毎日山を歩いたり、みんなの家へでかけて話してこんでおられるのをみても、一体何をしておられるのかわかりませんでした。羊のことばかり聞いておられるから獣医さんかとも思ったり、村の人達の生活について根ほり葉ほり聞いておられるから、このごろローマの大学から時々やってくる社会学とか心理学とか地理学だとかの先生方と同じなのだろうかとも思いました。

でもこの本をみてわかりました。人類学というと、裸にしてあちこち測ったり、どこか遠い島の土人を調査するのだと思っていたのは誤解でした。でも○○学などといってもどこが違うのか大学の時間いた講義でもよくわかりませんでした。

私達の村には古いものがたくさん残っています。でもそれだけを目あてに村にやって来る人は私はきらいです。まるで博物館にやっても来たような目つきで私達をながめまわします。といって、最近のマツマレッタ民族芸能団が話題になりマスコミ

にもとりあげられてから、山村の都市化だ

とか、新しい村の建設だとかいって村へやってくる人にも何か淋しさを感じます。古いものも、新しいものも、みんな今の村で生きています。この村を描くのにどれも欠かしてはならないものだし、それらがまとまってそこにあることをぬきにすると村のこんなところがないと思います。先生の御本を読んで私が一番うれしかったのはこのこととがはっきり描かれていることです。そしてそれにも増してうれしかったのは、レオナルド、カリーノ、ドン・トマゾ司祭というような人の体と心を通じて村が描かれていることです。村の姿は村人の一人一人の中にこそあり、さらにイタリアという国の姿は一つ一つの村や町や都市の中にこそあるはずで、先生はあとがきでこの本をスタイルに迷いがあつたと書いておられますが、私はこのようなスタイルでもっといろいろな国の村が描かれていけばよいと思います。大学の時に私もオスカー・ルイルという人の本や、スウェーデンのミュールダールという人の中国の農村のことを書いた本を読み、本当にそこに描かれた家庭や村に自分が入りこんだような気がしたことを

思い出します。

先生は牧畜文化ということに大変関心を持っておられるようです。この本の目的の半分もそこにあるようです。しかしそのことを書かれている部分は他とちがってずいぶん難しい学術的なことばも使われ、私などには読みづらかったところです。たとえば「キリスト教における牧畜文化の構造的アナロジー」という表もたいへんおもしろい思いつきだと思えますが、でもこの本の中では何か余計なものという気がします。フランチェスコおじさんの章だけ独立した文法論になる必要があるでしょうか。それこそ、独立した論文で書かれればよいでしょう。ついでに余計なことをいえば、あのようなかッコのいい思いつきは最初いっしょに來られたウメサオとかいう先生には似合いますが、先生にはあまり似合わないような気がします。村の楽しさ苦しさ、喜びや悲しみ、新しいものと古いものとの葛藤。外から來た人には、しよせんわからないのかもしれない。トマゾ司祭はそれをけんめいに理解しようとして、また傷つきました。私は先生が村へいらっしやったのは牧畜文化論を考え、論文を書くためだけでは

ない、少なくとも二度目にいらっしやった時の目つきや笑顔はそうではないと信じています。別に村の一員になってほしいとか同情してほしいというのではありません。村の人と同じように喜び悲しむ人が外にいないということがうれしいだけです。

長い手紙になってしまいました。私のこと覚えていて下さいますか。あのころ先生は村の娘達のがれの的でした。私達はいつも集まると先生のうわきをしたものになります。いつかローマへゆくバスではいっしょになりました。その時私に村へ残るのかローマにまた出てゆくのかとお尋ねになりました。何も答えず黙って先生の目をみつめたことの意味はわかっていただけなかったようです。

(秋山元秀)

前近代における社会動態

中村賢二郎

社会動態という言葉は日本語として熟していないが、英語のソシアル・モビリティの訳語であり、社会階層間の流動性を指している。前近代と社会階層間の流動性、この両者はアンティノミーではないか、と首をかしげる人もあろう、社会階層間の流動性は、市民革命ないし産業革命後の近代についてのみ見られる現象であり、身分制、身分的特権の強固な前近代社会では、社会階層間の流動性は考えがたい、とされてきたからである。

しかし宋以後、とくに明清時代の中国では、官僚層に一定の身分的特権があったにもかかわらず、ある程度の規模の社会的流動性現象が見られることが、最近の研究で実証されつつある。もともと宋以後の中国は、官僚層に身分的特権が認められていたとはいえず、すでに身分制社会ではなくなっているが、前近代のヨーロッパや日本

でも、社会階層間の流動性現象を想定できるのではないか、少くともそのような視角から検討し直してよい問題があるのではないか。このような考え方から発足したのがこの研究班である。

日本、中国、ヨーロッパ諸国についての研究者を集めて共同研究を始めてから、すでに一年近くたつが、現在までのところ、どのような成果がでてくるか、しかとは見極めがたい、というのが実情である。まず研究の前提として若干の方から近代ヨーロッパ、日本における社会階層間の流動性現象の実態と研究方法について報告をしていただき、また川勝義雄氏、夫馬進氏からは中国についての研究成果を紹介してもらったが、前近代のヨーロッパや日本については研究はなお模索の段階にある、といわねばならない。けれども、われわれの研究目標、というより研究の姿勢として、次のようなことはいってよいだろう。

社会階層間の流動性というのは、相当長期間を考察してみて初めて確認できることであり、研究分担者は長期的な展望の中で研究を進めることが要請されている。次には、このような問題は比較史的な研究意識なしには意味をなさないもので、その視点を生かすことである。

研究の中間成果ともいえるべきものは、次回にこの誌上を借りる時まで用意しておきたい。

日中戦争期の政治と社会

古屋 哲 夫

日中戦争というと、一般には蘆溝橋事件以後の全面戦争だけを指していると受けとられる場合が多いが、この研究班では、いわゆる「満州事変」と「支那事変」とを一つづきの過程として捉え、それを「日中戦争期」と呼ぶことにした。といっても、ただ便宜的にそういう呼び方を採用したわけではなく、むしろ、何故この両「事変」を一つづきの過程として捉えなければならないかという問題を明かにすることを、一つの主要な課題としてこの研究班は発足したといってもよい。

もちろん両「事変」を別々に研究対象とすることは可能である。たとえば柳条溝事件が極めて周到に準備された陰謀であったのに対して、蘆溝橋事件の場合には日本側の戦争計画によって起きたものではない、という比較論がある。この意見はその限りでは誤ってはいない

が、しかしこうしたやり方では、蘆溝橋事件がなぜぐさま全面戦争に発展してゆくのかといった疑問を解くことができない。そこでこうした問題を明らかにするためには、「満州事変」以後、日中戦争が局地戦の形で継続しており、この間に日本の支配体制は対中国全面戦争の方向に動いていったという枠組みから、もう一度事態を見直してゆくことが必要となるように思われるのである。

もちろん問題は単純ではない。こうした云い方はただちに、皇道派に代表される対ソ戦論や石原莞爾の対ソ戦準備優先論をどうみるのかという疑問を呼び起すにちがいない。しかし同じ問題は逆にと、なぜ皇道派や石原構想が敗退してゆくのかという問題につながっている筈である。

研究会は目下のところ、こうした問題をみてゆく「基点」として、満州支配の実態がどのようなものであり、それがどのように日本の国内体制にはねかえり、また華北侵略に連続してゆくのかといった点に焦点をおきながら進められているが、前述したような大状況論を展開する前に、資料の発掘に大きなエネルギーを注がねばならないというのが正直なところである。地道な資料整理と大状況的関心とをどう有機的に発展させるかが、この研究会の課題であるといってもよいだろう。

現代中国班の二年

竹内 実

現代中国班というのは略称であって、「現代中国の政治過程と民衆の意識」という長ったらしいのが、じつは正式のテーマである。

発足は一九七五年（昭和五十年）四月であるから、はやくも二年を経過したことになるが、じつはそれより半年ばかりまえから、山田慶児、吉田富夫、それにわたしの三人で、小さな研究会をひらいていたのである。しかしそれは山田慶児の三極構造の論文をとりあげただけでおわった。

長ったらしいテーマになったのは、社会構造や政治・政策の追究にかざるのではなく、民衆の意識（いわゆる、進んだ意識、おくれた意識の双方をもふくめて）もとりあげたいと考えたからで、一般的にすべてを網羅しようというわけではなかったが、結果的にはさまざまな関心をもつ人間が集って、しばらくは、多勢の参加者でにぎわった（最盛期は三十六名を数えた）。二次会で、文学論やイデオロギー論が、それなりに白熱的にたたか

わされたのも、いちおう「現代」と区切った研究会の誕生をむかえて、新鮮な興奮と喜びを感じたという共通性がわれわれのなかにあったからだともう。

第一年度の研究会は、各自が自由に題目を選び、報告したが、第二年度は、A、B二組に分け（重複して出席してもよい）、A組は第一年度の延長の形式をとり、B組は、作業をとりいれた個別テーマを追求することとした。A組には、さらに、現状分析をくみいれた。

現状分析については、まだなじまない点がないわけではないが、東京から江頭数馬（毎日新聞・論説委員）も出席して、新しい情勢にも眼をくばった討論がおこなわれている。B組は、毛沢東初期著作集の編訳・注記をすすめている。これには東京在住の研究者（班外）も参加している。こうした討論や作業をつうじて、動きの激しい現代中国をみすえていく、この研究班としての視点を生みだしたいというのが、わたしの希望であるが、これには参加者全員も同感してくれるとおもう。このところ、出席者は、A、B組、それぞれ十四、五名といったところである。

〔付記〕人文科学研究所内規によりまして、共同研究班の責任はすべて班長が負うことになっています。前号の本欄の私の文章「姜在彦氏に研究会の指導をお願いした……」についても、その例外ではなく、決して班長の責任を放棄するものではありませんので、その旨つけ加えさせていただきます。（飯沼二郎）

私の日本近・現代史

飯沼二郎

研究者のなかには、ひたむきに一つのテーマを追究するものと、同時にいくつかのテーマを追うものと、二通りのタイプがあるようである。前者は純情型、後者は浮気型といえようか。私は後者のほうのタイプだが、それは現実には浮気ができない代償行為かも知れない。

一つのテーマを心に定めておくと、私には東奔西走して資料を蒐めるようなことはとてもできないが、それでも五年、十年とたつうちに、いわば秋の落葉が自然とつもるように、資料がたまってくる。こうして少しずつ資料を蒐めているテーマに、横井時敏(近代農学の創設者の一人)、渡瀬常吉(日本組合教会の朝鮮伝道主任)、短床犁(近代日本の人民による世界的大発明)、地主制、世界資本主義と朝鮮、などがあるが、これらのテーマの根底に、私の「日本近・現代史」がある。

それを、先年、『地主王政の構造』『石高制の研究』という二冊の本にまとめてみたが、まだまだ不十分きわまるものであることは、誰よりも私自身、いちばんよく知っているつもりである。しかし、その構想には、捨てがたいものがあるので、いずれ、より完全な形にして、みなさまの前に提出したいとおもっている。ここには、この『人文』が所内報だということに免じて、その構想を気安く話させていたきたい。

封建制というものは、もともとが地方分権的なものだが、それを妨げない程度の、ゆるいかたちの中央集権的な制度が、「封建国家」を形成している。ところが、商工業がしだいに発達するにつれて、それに対応し、それを利用して、領主のなかでの最有力者が中央集権的な制度を強化してくる。こうして、諸領主のもつ封建特権をとりあげ、彼らを自由に支配し得るようになった体制を絶対王政とよぶ。江戸時代が、そのような体制であったことは疑えない。ただ、日本の絶対王政の特徴は、徳川將軍の支配体制があまりにも巧妙に仕組まれていたために、二世紀半以上もつづきながら、ついに、その体制を打倒するまでに地主とブルジョワが発達しえなかった点であろう。

しかし、それだからといって、明治維新がブルジョワ革命であることには變りがない。以後、地主とブルジョワの連合政權が一九四五年までつづく。それは、いずれの封建社会のブルジョワ革命直後にもみられる「地主王政」の日本型である。この時期の天皇が、日本で最大の地主であるとともに、最大の資本家であったことは、まさに地主王政の「象徴」にふさわしい。

この時期の体制の「半封建的」な性格が主張されて久しい

が、そのことが直ちに絶対王政である証拠にはならない。同じく半封建的といっても、封建社会の中に資本主義的なものが存在しているばあいもあれば、逆に資本主義社会の中に封建的なものが存在しているばあいもある。この区別は重要である。

国民経済観の二類型

阪 上 孝

フランスの近代経済思想史は、二つの国民経済観の対立・葛藤によって織りなされているように思われる。一つは、経済規模の拡張、生産力の拡大を主張する拡張主義的な国民経済観であり、いま一つは拡張ではなくて安定を、生産力拡大ではなくて調和的生産を主張する反拡張主義的な国民経済観である。

一八世紀においては、これら二つの国民経済観の闘争の場は『奢侈論』であった。いうまでもなく奢侈の問題は、マンデヴィル以来、道徳哲学上の大問題である。モンテスキューはこの問題を論じて、奢侈は財産の不平等にもとづいているが、同時

にそれは経済的剰余の増大、富裕の拡大の産物であり、したがって文明の進歩の証拠として肯定されるべきだという。この点はかれの政体論にも深くかわる。かれの理想とする政体は君主政であるが、『共和政は奢侈によって滅び、君主政は貧困によって滅びる』のである。

ルソーは奢侈—不平等—経済発展をモンテスキューと同じような仕方に関連させながら、対照的な結論を下す。「民主政は小さくて貧しい国にしか適さない」からである。ルソーにおいて経済発展を根本的に斥ける反拡張主義的な国民経済観はきわめて純粹なかたちで展開されたということができる。

産業革命の時代である一九世紀においては、この二類型は「サンリシモンアン」とティエールの国民経済観のなかに鮮明に見出される。周知のようにサンリシモン主義は産業革命の思想でもあり、産業発展に決定的な意味を付与したのであった。それにといてブルジョア秩序の徹底した擁護者ティエールは、産業発展のための諸改革にたいして一貫して反対し続ける。信用制度の改革、鉄道建設、関税改革などは、調和に満ちた一個の完全な全体であるフランスを根本から崩壊させる、というのである。

大恐慌を経た一九三〇年代においても、反拡張主義的な国民経済観は強い影響力を保持し続ける。それは「フランスは一つの庭園である」という言葉で表現され、フランス経済の自立的性格、調和的性格を賞揚し、人民戦線の経済政策を根本的なところで決定したのであった。

反拡張主義的な国民経済観がさまざまな条件、とりわけ強大

な中産階級の存在に支えられて、強力な基底通音として鳴り続けたところにフランスの経済思想史的特質が見出される。さらにこうした国民経済観が保守主義との結びつくのではなくて、ラディカリズム（たとえばブルードン）としても現われるところにフランスのラディカリズムの、「フランス社会主義」の問題性があるであろう。こうした意味で反拡張主義の系譜と意味を考えてみようと思っている。

十九世紀のウイグル文献

浜田正美

中国の新疆ウイグル自治区には、現在五種のトルコ系民族が住むが、自治区の名にも示されるように、人口三百五十万のウイグル族が、断然多数を占めている。主として、タリム盆地周辺のアアシスの住民であった彼らウイグル族は、十七世紀以来、それ以前のベルシャ語に代えて、チムール朝時代の西トルキスタンで成立した文語トルコ語を、彼らの共通の書写語とし

て、今世紀の初頭に至るまで用いて来た。所謂東トルキスタンにおいて書かれた、この中央アジア文語トルコ語の文献が、全体としてどれほど存在するかは、現在でも十分には明らかにっていない。新疆解放以後、各地で収集し、ウルムチの新疆博物館に所蔵されると伝えられる写本について、その規模・内容ともに、殆んど知られるところがないからである。一方、前世紀後半から今世紀にかけて、新疆を訪れたヨーロッパ人によって、かなりの数の写本が持ち出され、現在レニングラードの東洋学研究所、パリの学士院図書館、ロンドンのインディア・オフィス図書館等に所蔵されている。ソヴィエトを除けば、これらの写本に関する研究は殆んど行われておらず、写本を収集した当人たち（シヨウやグルナルなど）が少しく取り扱って以後は、十分なカタログすら作られぬ状態に放置されて来た。私が調査したところでは写本の大部分は、十九世紀のものであるが、その内容は極めて多岐にわたっている。まず、大きな部分を占めるのが、十七世紀から今世紀始めまでの歴史に関するもので、とりわけ一八六四年の叛乱とそれに続くヤクープ・ベクの支配に関するものが多い。宗教文献としては、トルキスタンのイスラムの聖者たちの伝記、回教徒の用いた祈禱書の類などがあるが、イスラム化以前のウイグル族の宗教観念の残滓とも思える、バクシと呼ばれる呪術師たちが用いた呪文集、易の陰陽のシステムに似た方法を用いる占書など、また文学としては、東トルキスタンの詩人たちの詩集、トルキスタンの日常生活に題材を取ったコント集、ことわざ、なぞなど、それに中国小説の翻訳までも存在する。

清朝に対する反乱、ヤクープ・ベクの支配、彼をはさんでの英露両植民地主義の角逐、清朝の再征服、省制の施行へと続く、十九世紀後半の新疆のいわば大枠の歴史を明らかにする一

おくりもの ②

桑原・藤枝名誉教授、河野教授

フランスから勲章を受ける



フランス政府は本研究所名誉教授桑原武夫氏に対し一九七五年六月一日付で芸術文学勲章シュヴァリエ級 (L'Ordre des Arts et des Lettres, Chevalier) を、一九七五年二月二七日付でレジオン・ドヌール

方で、その枠の中にこれらの文献の語る当時のウイグル人の生活を重ね焼きにして行けば、一味違うウイグル社会史が出来るのではないかと、考えている。

勲章、シュヴァリエ級 (L'Ordre de la Légion d'Honneur, Chevalier) を、また名誉教授藤枝晃氏および教授河野健二氏に対し一九七五年八月一九日付でパルム・ザカデミック勲章、オフィシエ級 (L'Ordre des Palmes Académiques, Officier) をそれぞれ授与したが、一九七六年一月三十一日午後六時半より、関西日仏学館において、その贈呈式がおこなわれた。

フランス政府を代表した神戸総領事アンリ・ブッフアンド氏が三氏の前でその功績をたたえ、勲章をそれぞれの胸に着けた。それに応えて、三氏はそれぞれフランス語であいさつ。その後パーティーに移り、三〇人をはこべる招待参列者が三氏の勲章授与を祝った。(山下記)

谷氏に日本ノンフィクション賞

谷泰君が『牧夫フランチェスコの一日』(NHKブックス)によって日本ノンフィクション賞を受賞された。この賞は財団法人角川文化振興財団が年一度授与するものであり、今年度は第三回目に当る。応募作品は自薦他薦ふくめて約二五〇点あったとか。谷君の著書はそのうちから選ばれた授賞作二点中の一つとなったわけである。選者の一人小松左京氏の談では、学問的な質の高い読物として、同氏が真先に惚れこんだとのことであった。(中村記)

旅

日蔭のない国

熊倉 功 夫

思えば十年前の念願がなつた旅行であつた。昭和四十年、まだ個人旅行の自由のなかつた韓国へ行きたいと、ある仏寺をめぐる団体旅行に加わつた。渡航手続きをすませて、査証のおりるのを今か今かと待つうちに、思いがけぬ突発事件が起つた。偶々、北朝鮮からの技術者を、はじめて日本政府が受けいれる決定を下したのである。韓国は当然報復にでた。日本人に対する査証の発給を停止した。私は、出発港の神戸へ向う予定の日、旅支度のまゝ、中止の報に涙をのんだわけである。この無駄な企のなかで、ただ一つ慰めになつたのは、旅の準備をするなかで、柳宗悦という人物に、『朝鮮とその芸術』という書物とおしてめぐりあつたことである。柳の限らない朝鮮の美への愛に圧倒された。

私は柳の『朝鮮とその芸術』をその地で読みたいと思つた。できれば石窟庵の仏の前で、ソウルの街角で。こんな甘つたるい感傷は、この七月、念願の韓国へ着いた、その瞬間に打壊されたのである。韓国茶の調査団に同行した私は釜山の空港に到着すると、税関で徹底的に所持品の検査をされ、トランクの下から柳の『朝鮮とその芸術』を取りだされた。無論、隠し持つ意識は全くなかつた。この書物は現在韓国語訳されて市販されているのだから、問題のあらうはずはない。ところが税関吏はまじまじと書名をながめた挙句に「没収する」というのだ。理由は『朝鮮の……』という文字にある。こうなつたらいくら説明しても無駄だ。帰国の際に返還するという約束で、空しい気持ちで税関を出た。屋外に立つたときの、七月のひざしに照りつけられて白っぽい舗道が眼底にあざやかに残る。

七月の韓国は暑い。仏国寺の長い参道を歩く時も、慶州の古墳を訪ねても、はたまた扶余の古城に登つても、強いひざしはようしやなく照りつける。日蔭がない。生身をむきだしに日にさらすことへの恐怖を感じる。無惨なまでに木が失なわれ、また育ちにくい国であれば、いたるところに木蔭を求めるのは無理かもしれないが、美しい田園の風景をみながら、何故か近代的な装いをこらした観光地であればあるほどに、木蔭の少ないことを思つた。木蔭はたんにいこうための場所であるだけではない。複雑なかげりの蔭は、隠された人間の精神が息づくところでもある。私の歩いたような狭い観光地には、もはや精神のいこいを得る地は所詮ないのか。日蔭のない国、それはある心象風景であつた。

シカゴ大学オリエント研究所から

前川 和 也

九月二日から一〇月二五日まで約五週間、シカゴ大学オリエ

ント研究所で、主としてウル第三王朝時代の楔形行政・経済文書を調べていました。御承知のように、とりわけシカゴはヨーロッパ都市のような伝統の重みといったものを欠いていて、まったく愛想のない町です。また夜間の歩きは遠慮していましたから、シカゴでの面白い話をお伝えできないのが残念です。

オリエント研究所には、いまもっぱら行政・経済文書の分析に関心を寄せているゲルブ教授がおられることですし、また半世紀前にバートンによって出版されたラガシュ文書集成の原粘土板がいまは研究所に保存されています。バートンのこの手写は学史のなかでも最悪というべきもので、まったく使いものにならない不正確なコピーも多く、原粘土板を直接調べてみなければならなくなりました。また研究所には、その他膨大な未公刊楔形文書が保存されています。関係文献の完備、優秀な人材とあいまって、研究所は楔形文書研究センターとしては、世界で一、二を争う機関であるといえます。このようなことから、ゲルブさんをお願いして、約一か月オリエント研究所に滞在したわけです。

シカゴでは、バートン・テキストを検証するほかに、ウル第三王朝時代の土地文書とりわけ小作地関係の粘土板について、ゲルブさんとともに仕事を進めました。わたしが渉猟したかぎり、ざんねんながら研究所には、小作地にかんする未公刊文書はほとんどみあたらず、計三粘土板を発見することができただけでした。ただ皮肉な話ですが、ゲルブさんからは、かれが大英博物館で発見した長大な、しかもほぼ完全な小作地文書の写真をみせてもらいました。私はこれまで約三十サンブルをいろいろな粘土板のなから拾い集めて、当時の小作制度について、ある仮説をこしら

えていたのですが、じつはこのテキストだけで六十以上の実例が記載されていて、しかもそれらはことごとく私の仮説とうまく適合するのです。

ありがたいことに、ゲルブさんはこの文書の公刊権を私に譲って下さり、また大英博物館もこれを了承してくれました。この他にもイスタンブール考古博物館の二テキストを加えて、論文を完成させるつもりですが、まだまだ重要な粘土板が未発表・未整理のままで世界各地の博物館に眠っているというよい例になるでしょう。イスラエルのある研究者のジョークでしたけれども、なんとか大英博物館の地下室倉庫に、発掘調査隊を派遣してみたいものです。

旅——メキシコ

吉田 光邦

メキシコ・シティは約二五〇〇メートルの高地である。空気の薄さを感じるとは聞かされていたが、たしかに息は切れやすい。そして街全体にあふれるのは、意外なほどに濃いスペイン文化の匂いであつた。ホテルの近くにあつた聖フランシスコ教会のたたずまいは、ヨーロッパの教会とすこしも変らぬ雰囲気である。美しい筆致の聖マリア像が、聖壇の正面にひっそりとかかり、朝早くからその前に膝をつく人びとはたえない。

そして至るところに残るタイル張りの建物。黄・緑・オレンジなどを主色とするもの、またはコバルトと絵付けしたタイルなどは、いずれもスペイン風、いや正確に言えばイスラム風というべきものである。

わたしが目的とした世界クラフト会議は、この首都シティから車で約三時間ほどかかる日本でいえば国民休暇村とでもいえる地域を、全部借り切って行われた。設備は簡素だけれど、濃い熱帯性の緑と華麗な花々に囲まれたみごとなゾーンであった。宿舎は四人一室だが、ベッドも清潔、冷蔵庫などもつき自炊設備も各室にある。たしかに市民が二、三日やってくるには行き届いた施設であった。食堂は数百人を入れる、巨大なカフェテリアである。

シティとこの会議場のちようどなほどにクエルナバカという小さな町がある。かつてのスペインの征服者コルテスの居住したところ。その城跡はそのまま博物館となる。またもと修道院だった大聖堂がある。外部はかなりいたみがひどい。その内壁に、長崎二六聖人の殉教図がびっしりと描かれる。伝聞にもとずいて描かれたものだけに、服装その他には多くの間違いがある。時代は

殉教直後という。長崎の悲劇がいちやく伝わったものとして、最近知られはじめたものである。かつてのカトリックの世界性が思われるものだ。

メキシコと日本、また東洋はもととずいぶん近かった。十六世紀のリンズホーテンの『東方案内記』は、中国陶磁が大量にメキシコに輸出されることを記すし、中国陶磁片も発見されている。あるいは今日残るメキシコ陶器のパターンには、イスラム風というより中国風といってもいいものが散見されるほどだ。

一週間ぶつ通しでしかも一個所に泊りこみというプログラムのために、名高い古代文化の遺跡をめぐる余裕はなかった。しかしシティにある人類博物館は、この古代の遺物を十二分に展示していた。建物全体のデザイン、また展示の技法などはみごとであった。ゆったりしたスペース、照明のデリケートさ、模型やモデルを加えた教育性への配慮。そして処々の休憩所にはメキシコの前衛画家たちの作品がかげられる。それは原始古代を中心とした世界でありながら、なお現代への架橋をたくみに行っている印象的なデザインだったのである。

▼所員へのアンケート▲

「さいきん読んで感銘をうけた本」

(五十音順)

荒井 健 Ⅱ 『平太郎化物日記 密柑地獄 不思議長屋』(巖谷

小波お伽噺文庫) 大和書房

飯沼二郎 Ⅱ 小塩節『春近く』女子パウロ会

高史朗『生きることの意味』筑摩書房

上山春平・佐々木高明・中尾佐助『続・照葉樹林文

化 中公新書

福田紀一『ホヤわが心の朝』新潮社

内井惣七 Ⅱ 梶原武雄『石の方向』日本棋院

中村賢二郎 Ⅱ J・H・ブラム 鈴木利章訳『過去の終焉』法

律文化社

見市雅俊 Ⅱ E. P. Thompson, Whigs and Hunters; the Origin

of the Black Act, Allen Lane

山崎正和『不機嫌の時代』新潮社

吉川忠夫 Ⅱ 日原利国『春秋公羊伝の研究』創文社

お客さま

九月二一日(火) 午後二時—五時

本館会議室

パリ第一大学教授 ジャック・エルス氏
「西洋における氏族制」

九月二七日(月) 午後二時—五時

本館会議室

パリ社会科学高等研究院院長

ジャック・ルゴフ氏

「中世社会のマンタリテについて」

一〇月五日(火) 午前一〇時—午後五時

本館会議室

日ソ経済学シンポジウム「多国籍企業について」

出席者 科学アカデミー経済研究所長

カプスティン氏

同世界経済国際関係研究所教授

カシン氏

同アメリカ・カナダ研究所教授

イヴァノフ氏

同世界経済国際関係研究所博士

モロゾフ氏

同世界経済国際関係研究所博士

レオンチエヴァ女史

一〇月二一日(月) 午後一時 河野研究室

ハンガリア経済計画研究所博士

エヴァ・エールリッヒ女史

日本の経済学研究について懇談

一月一六日(火) 午前一〇時三〇分—正午

ワシントン、ウッドロー・ウィルソン国際研究センター長

ジェムス・H・ビルントン氏

林屋所長、多田教授と共に、日本側研究者の受入れ促進について懇談

一月一八日(木) 午後二時—五時

本館会議室

アレクサンドリア大学歴史学教授

ハッサン・ザザ氏

「東西文明の橋としての中東」

(河野記)

キュジャジャン氏

一九七六年六月一四日、日本学術振興会の招聘で来日したソ連科学アカデミー・社会科学情報研究所副所長、リバリット・エス

・キュシヤジャン (Lipart S. Kinzadjan)

氏が来訪、林屋所長、河野教授と歓談し、今後とも文献交換をさかんにしたい旨語られた。

(竹内記)

ハンス・シュタイニンガー氏

(西独ビュルツブルク大学教授)

中国中世の社会と文化班では、去る一一月一七日、来日中の教授御夫妻を本所にお招きして、御研究の一端をうかがう機会を持った。お話は南唐・譚峭の『化書』に関するもので、道教的修養論から国家論に及ぶ、一種の諸神混淆の態を成すこの書の複雑な構造を、教授は明確なベースペクティヴのもとに我々の前に示された。しかし教授の本領は『関尹子』の研究にあり、同月七日、京都で開催された東方学会において、『関尹子』に現れた道家思想の宇宙普遍主義」と題する講演を行なわれ、道家の政治哲学を説明された。近々、『関尹子』に関する浩瀚な研究報告を世に問われると聞いている。教授は第二次大戦中、喉部に重傷を負われ、やや発声が御不自由にみうけられたが、正確な日本語による教授のお話は、ドイツのシノロジー端倪すべからず、という印象を聴衆に与えたに違いない。なお、席上、教授の弟子フランク・フィーデラー氏の手になる『化書』のドイツ語訳が、教授から本所に寄贈された。

(三浦記)

人のうごき

○荒井 健（東方部）・多田道太郎（西洋部）両助教は教授に昇任。（六月一日付）

○濱田正美氏は助手（東方部）に採用。（八月一日付）

○吉田光邦助教は、六月三日羽田発、メキシコのオズバック市で第七回世界クラフト会議に出席、ロサンゼルスで人類学博物館で資料蒐集を終え、同月一六日帰国。

○井上 清教授は、本年一月より北京大学で日本近・現代史に関する講義を終え、七月一三日帰国。

○熊倉功夫助手は、七月二日伊丹発、韓国の晋州・慶州・釜山・京城市内等で日韓合同茶業調査を終え、同月三〇日帰国。
○竹内 実教授は、八月七日伊丹発、台北の政治大学国際関係研究中心図書館で中国現代史に関する研究を終え、同月一六日帰国。

○横山俊夫助手は、九月一日羽田発、レイ

デン・ミュンヘン・パリ大学・ナポリ東洋学院で資料蒐集、オックスフォード大学で一九世紀の日英史研究中。五二年八月末、帰国予定。

○前川和也助手は、九月二二日羽田発、シカゴ・ペンシルバニア大学で楔形文書資料収集を終え、一〇月二六日帰学。

○内井惣七助手は、一〇月二七日羽田発、シカゴのアンバサダーホテルで一九七六年度科学哲学学会大会に出席、ミシガン大学で科学哲学に関する研究を終え、一一月一二日帰国。

外国人研修員

David John Boggett 科学史

王 徳 毅 台湾大学教授 宋代史

Louise Cort ハーバード大学フォッダ美術館学芸員 日本文化史

Charles R. Backus プリンストン大学大学院生 東洋史

郭 麗 英 中国仏教史

Jerry P. Dennerlina ナポリ大学助教授
明清時代政治社会史

Cavalli Francesca サンパウロ大学教授 日本美術史

Jerry K. Dusenbury ハーバード大学大学院生 日本近代史

Constance Johnson ペンシルバニア大学大学院生 中国社会学

莊 伯 和 中国芸術史

William W. Kelly ブランダイス大学大学院生 日本社会学

Donald Seekins 同志社大学嘱託講師 現代中国歴史

Michel Strichmann フランス国立高等研究院第五部研究員 中国宗教史

Robert P. Hymes ペンシルバニア大学大学院生 中国社会学

Laurence Kominz コロンビア大学大学院生 日本文化

Sonja Van Nostrand ブリタニッシュ・コロンビア大学大学院生 宗教史

James Reid カリフォルニア大学大学院生 日本文化

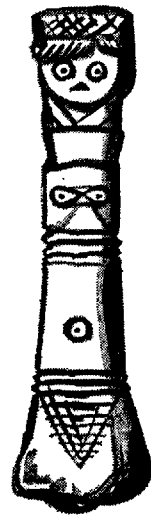
Hell Liliane 西洋文化

Antonino Forte ナポリ大学助教授 中国宗教史

Eriksen Jons Tue Kongsgaard 歴史地理

書いたもの一覧

一九七六年六月—十二月
(五十音順 ◎印は単行本)



・会 田 雄 次

正論

サンケイ新聞毎月一回

六月—十一月

◎日本人の生き方

講談社 六月

◎勝者の条件

雷鳥社 十一月

◎日本人材論

講談社 十一月

・秋 山 元 秀

多賀城・信長の道(矢守一彦編『空からみた歴史景観』)

大明堂 七月

・飛 鳥 井 雅 道

◎近代の潮流

講談社現代新書 八月

敬天愛人と新政厚德(西郷隆盛全集、第一巻、月報)

大和書房 一〇月

近代文学史の構造をめぐる

文学 十一月

日本民主主義の原点

朝日新聞夕刊 一一月一〇日

・荒 井 健

詩の効用(『講座文学』四巻)

岩波書店 六月

寸言

文学 八・九・一〇月

銭鍾書『包圍された岩』第二章(訳)

颯風 九号 一〇月

解説・吉川幸次郎『唐代の詩と散文』(学術文庫)

・飯 沼 二 郎

初期『新人』における海老名と渡瀬

講談社 十一月

模倣と独創

キリスト教社会問題研究 二四号 三月

減反政策を生き抜いた農民

アジア経済 一七巻三号 三月

書評・小塩節『春近く』

中央公論 五月号

西ヨーロッパと日本人(講座『比較文化』三巻)

共助 六月号

まずくて高くて危険なヤサイ

研究社 七月

食糧(神戸YMCA『世界経済の重要課題』現状と展望)

展望 八月号

日本の農業の思想

神戸YMCA 八月

戦後日本資本主義と農業・農民問題(『ロッキード問題講演集』)

思想の科学 八月号

・戦後史を裁く

京都・ビーナツ総会 九月

農民よ、自信をもて!

きのこ 九月号

◎農具(堀尾尚志と共著)

法政大学出版局 一〇月

市民運動・京の夜ばなし再話

思想の科学 六八号 一〇月

国際農業博物館会議

農業史研究会会報 二号 一〇月

食糧自給と日本農業

東北開発研究 二巻三・四合併号 一〇月

米作をめぐる農政の矛盾 時事教養 七号 一月

書評・韓国問題キリスト者緊急会議編

『韓国民主化闘争資料集』 聖書と教会 一一月号

座談会・農業の近代化とは何か(野沢昌郎・熊谷康・

一楽照雄と) 農業協同組合 一一月号

書評・二葉憲香・梅原正紀編『天皇制と靖国』

朝日ジャーナル 一八巻四六号 一月
公庫月報 一月号

白立経営農家とは何か 講談社 一〇月

井上 清 現代評論 一一月号

◎昭和の五十年 無産階級独裁下の継続革命 図書新聞 一一月二三日

われわれがなお「臣民」である構造

今井 清 集英社 六月

◎礼記・上(共訳)『全釈漢文大系』(一二巻)

上山 春平 中央公論社 一〇月

◎統照葉樹林文化(共著) ツバキと椿 展望 一一月号

内井 惣七 科学哲学9(一九七〇) 一一月

様相パラドックス 西漢官僚における「賢」と「能」

江村 治樹 名古屋大学東洋史研究報告 四号 一一月

太田 武男

内縁と外縁(於保不二雄先生還暦記念『民法学の

基礎的課題』下)

婚約と結納(高築公之先生還暦祝賀『婚姻法の研究』下)

勝村 哲也 七月

漢書地理志郡県名索引 鷹陵史学 二号 九月

河野 健二 現代の理論 七月号

二月革命とフランス社会主義 思想 九月号

「独裁」概念の獲得 現代思想 九月号

ソ連と中国 世界政経 九月号

熊倉 功夫 日本美術工芸 六月―十一月

近代の茶の湯 淡交 六月―十一月

近世茶道史序説 武道 六月―八月

茶の湯武道記 同門 六月―十一月

茶人ライバル物語 季刊日本思想史 一号 七月

戦国的なるものと近世的なるもの 茶湯 一一号 七月

『南方録』成立とその背景 三一書房 一一月

◎日本庶民文化史料集成・数寄(共編) 中国文芸茶話(第八、九回) グラフィック茶道 六、七月号

表現としてのプロレタリアの文化大革命(講座・文学)

竹内 実 岩波書店 八月

岩波書店

岩波書店

岩波書店

岩波書店

岩波書店

カントンのマオ・ツォートン

現代思想 九月号

文人毛沢東を偲ぶ

毎日新聞 九月一〇日

詩と革命・人間毛沢東

朝日新聞 九月一〇日

革命の詩人

朝日ジャーナル 九月二四日号

劇的な展開もありうる流動状況へ

週刊朝日 九月二四日号

中国にとって毛沢東とは何であったか

週刊東洋経済 九月二五日号

魯迅と日本

公明新聞 一〇月一四日

三度の危機を勝利した毛沢東の智恵

週刊朝日 一〇月一五日号

中国のクーデター事件に想う

神戸新聞 一〇月二〇日

江青の栄光と挫折

週刊朝日 一〇月二九日号

◎紀行 日本のなかの中国

朝日新聞社 一〇月

革命第二代はどこへゆくか

中央公論 一二月号

テーブルの哲学論争(中国哲学史の展望と模索)

創文社 一一月

クーデター対反クーデターの争い

世界週報 一一月二九日号

作られる「華国鋒神話」

朝日ジャーナル 一一月二二日号

・多田 道太郎

◎南アメリカ紀行(共著)

サンケイ新聞出版部 一〇月

・田 中 淡

中国建築の歴史16〜20(共訳)

建築知識 六〇九、一一月号

◎劉敦桢『中国の住宅』(共訳)

鹿島出版会 七月

中世新様式における構造の改革に関する史的考察

『日本建築の特質』

中央公論美術出版 一〇月

・谷 桑

解説・梅植忠夫『狩猟と牧畜の世界』

講談社 六月

キリスト教の儀礼と神話

—西欧精神にとつてのその象徴構造の意味—

(講座『比較文化』三巻、西ヨーロッパと日本人、所収)

研究社 七月

◎牧夫フランチェスコの一日—イタリヤ中部山村生活誌

日本放送出版協会 八月

ガリレオ・ガリレイ『星界の報告、他二編』

岩波書店 一〇月

(旧訳改訂改版)(共訳)

・砺波 護

中国の都城(上田正昭編『日本古代文化の探究 都城』)

社会思想社 六月

書評・谷川道雄『中国中世社会と共同体』

日本読書新聞 一一月八日

・中村賢二郎

原典宗教改革史(共編訳)

ヨルダン社 七月

宗教改革と国家

ミネルヴァ書房 八月

書評・樺山紘一著『ゴシック世界の思想像』

日本読書新聞 一〇月二一日

・浜田 正美

書評・前嶋信次・加藤九祚共編『シルクロード事典』

・林 巳奈夫

史料 五九卷四号 九月

「西周金文に現れる車馬関係語彙」

甲骨学 一一号 六月

『上海博物館』「青銅器」の章及び青銅器の図版解説

九月

・林屋辰三郎

中世芸能史と私『日本文学史』三 中世の文学

有斐閣 六月

日光への道『江戸時代図誌』九 日光道

筑摩書房 六月

祇園の花傘（こころのページ、天窓）

朝日新聞 六月二六日

祇園祭の歴史（山鉦連合会『祇園祭』

筑摩書房 六月

消息数寄 五 近衛信尹

茶湯 一一号 六月

下手の横ずき（三井銀行業務部『百人百話』）

博報堂 七月

中村直勝先生と古文書

日本歴史 七月

寛永文化と池坊専好（池坊寺好立花名作集）

日本華道社 七月

休耕の愚かさ（こころのページ、天窓）

朝日新聞 八月六日

御陵まわり（こころのページ、天窓）

朝月新聞 九月三日

組織・管理社会（桑原武夫他『歴史と文明の探求』）

中央公論社 九月

古代国家の都市像（阪急文化叢書『日本の古京を掘る』）

阪急電鉄 九月

室町時代における京都（豊田武・ジョン・ホール編

吉川弘文館 九月

『室町時代』

朝日新聞 一〇月一日

季節の喪失（こころのページ、天窓）

朝日新聞 一〇月一日

「桃山文化展」によせて

朝日新聞 一〇月七日

桃山文化—天下人の世界（図録『桃山の文化』）

朝日新聞 一〇月

◎桃山への誘い（林屋辰三郎編『桃山』）

桃山ライオンズクラブ 一〇月

天下一の志向

朝日新聞 一〇月二八日

十一年七ヶ月の意味

京都市史編纂通信 一〇月

京都の歴史一〇年表・事典（京都市編）

学芸書林 一〇月

貝塚先生周辺（貝塚茂樹著作集）九 月報

中央公論社 一一月

◎吉野天川の魅力（林屋他共編『天川』）

巖々堂 一一月

庶民生活と芸能（岩波講座『日本歴史』近世四）

岩波書店 一一月

別業の文化（『江戸後代図誌』二、京都、三）

筑摩書房 一一月

◎神護寺の歴史（林屋他共著『神護寺』）

淡交社 一一月

消息数寄 六 近衛信尋

茶湯 一二号 一一月

吉野の回想（随筆集『吉野路』）

奈良県吉野町 一一月

新古の対照（こころのページ、天窓）朝日新聞 一一月三〇日

樋口 謹一

思想の言葉

思想 九月号

夫馬 進

明代白蓮教の一考察—経済闘争との関連と

新しい共同体—

東洋史研究 三五卷一号 六月

古屋 哲夫

日本ファシズム論(岩波講座「日本歴史」二〇) 岩波書店 七月
第六一議會・六二議會解説(『帝國議會誌』一二) 東洋文化社 六月

第六三議會解説(同右)一三 同右 七月

前川 和也

K. Maekawa-M. Yoshikawa, "Review of: J. Bauer, Altamerische Wirtschaftstexte aus Lagasch, Studia Pohl 9," *Orientalia* 44 (1975), Rome.

三浦 国雄

間断のない思想(『中国哲学史の展望と模索』) 創文社 一一月

茂木 信之

茅盾『蝕』三部作」論(一) 颯風 九号 一〇月

柳田 聖山

◎初期の禅史Ⅱ・歴代法主記(『禅の語録』3) 筑摩書房 六月

仮字正法眼蔵の秘密―道元とその弟子懐契― 展望 六月

禅語の発掘(一五)(『禅の語録』三、付録) 筑摩書房 六月

禅宗私史(四〇―四五) 正法輪 六月―十二月

今月のことば 花園 六月―十二月

江南智融禅師注・般若波羅蜜多心經 花信風 二月 七月

◎六祖壇経諸本集成(『禅学叢書』之七、編集解説) 中文出版社 七月

仏教と朱子の周辺 禅文化研究所紀要八号 八月

一休の思想とその生涯 大法輪 八月

◎絶観論(本文校定、国訳解説、英文訳注)(共編) 財団法人禅文化研究所 九月

祖堂集ものがたり第二話―そのまた草鞋をつくる人― 禅文化八二号 九月

◎訓註仏国論(共編) 仏国録刊行会 一〇月

入矢義高編『仏教文学集』紹介 鈴木学術財団研究年報 一二―一三号 一〇月

伊勢と甲州―夢窓疎石の生いたち、その一― 禅文化 八三号 一二月

山下 正男

比例の思想と階級の思想 現代数学 二月号

心身問題を扱うための一方法 関西哲学会紀要 第一三冊 九月

山田 慶児

◎ニードム『中国の科学と文明』第五卷、天の科学(共訳) 思索社 七月

◎ガリレオ『星界の報告・他一篇』(共訳、岩波文庫) 岩波書店 一〇月

吉田 光邦

二つのモールを見て アプローチ 六月

えんなる美の由来 京都 六月

科学と宗教 伝道 七月

現代人と時計 ワールド 七月

地方文化の創造を求めて 自治研修 七月

シャトルくらぶ展

◎江戸時代図誌 東海道 三 (編著)

科学と技術と教育と (対談)

メディアを支えた技術 (鼎談)

◎京のちやあと

◎工芸 世界の美術、一八

心のひだを織りこむ

雅のしなじな

もうひとつの時間像

日本人といけ花

ぬい

ヒンズークシのオリンピックク

物をつくること

度量衡考察

鋳物師

根来もの考

序文 「根付」

メキシコをたずねて

神と祀りと日本人 (対談)

日本における職業の歴史

現代の造形〈織〉展

東西文様散策

工芸時評

国民百科辞典、月報 一、二

かよい村 七月

筑摩書房 七月

中学教育 八月

放送文化 八月

朝日新聞社 九月

世界文化社 九月

マダム 九月

ふるさとへの旅、一号 九月

アドバタイジング 九月

くおーたりー池 九月

きものと装い 九月

郵政 九月

婦人公論 九月

技術と経済 九月

京のれん 九月

骨董 九月

淡交社 九月

青淵 九月

まいたうん 九月

職研 九月

視る 九月

カラーデザイン 八月

染織現代 六月

平凡社 九月

◎日本科学史 (復刻版)

・吉川 忠夫

魂気の如きはゆかざるなし―漢皇を訪ねて想う―

展望 六月号

・渡部 徹

人文学園から勤労者学園へ―産みの苦しみ―のりこえて

京都勤労者学園報 一三六号 六月

◎刊行によせて (監修 『島津労働組合三〇年史』)

解説・左翼労働運動の闘將、寒村 島津労働組合 九月

『荒畑寒村著作集』二)

◎国民的課題としての部落解放 (講演速記) 平凡社 九月

福岡市社同教推進連絡協議会

刷同問題再論 神山茂夫研究 三〇号 九月

大正デモクラシーと松本治一郎 部落解放 九月

人権週刊によせて

道標 (近畿郵政局同和对策室) 六号 九月

同和問題と私たちのかかわり (赤穂市同和教育

中央講座講演記録集) 赤穂市教育委員会 九月

人

文

第一六号

昭和五十一年三月二十日

京都大学人文科学研究所 発行

博文堂印刷

非売品